

等と云ひ、『報恩抄』に「此の大恩を報せんには必ず佛法を習ひきはめて智者とならで叶ふべきか」(一四五)等と云ひ、『四條御書』に「正法を弘むる事は必智人によるべし」(一五七)等と云ひ、『妙法尼御返事』に「此等の宗宗枝葉をば細かに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に隨分に走りまはり二十六年の年より三十二に至まで二十餘年が間鎌倉京叡山園城寺高野天王寺等の國國寺寺あらあら習回り候し」(一七七〇)等と云ひ、『波木井御書』に「十五年が間一代聖教總じて内典外典に亘りて無殘見定め生年三十二歳にして」(二一〇七)等と云へる文を拜すれば、御自身が開宗以前大に智慧學問を求め給ひたることは勿論門子檀越の勝機に對し給ひては直接間接に智慧(六般若波羅蜜)を獎勵し給ひたる聖意見るべし。其他『諸法實相抄』の「行學の二道を勵み候べし行學たへなば佛法はあるべからず」(九六三)等の文には慥に分修三學の意義を含み、又『觀心本尊得意抄』の「總じて一代聖教を大に分て二とす、一には大綱二には綱目也(中略)問法華を大綱とする證如何、答天台云く當知此經唯論如來說教大綱不_レ委_二細綱目_一也と、問爾前を綱目とする證如何、答妙樂云く、皮膚毛採出_二在衆典_一云云」(一三三三)等の文には爾前の三學も尚法華の爲の綱目として應用すべしとの意義を認むべく又『三世諸佛總勸文抄』の「八萬四千法藏我身一人日記文書也」(一八九九)等と云へる文の如きは一代佛教は通じて三學の法ならざることをなしとの妙義を含み。又『太田殿御書』の「強ちに成佛の理に不_レ違者且く世間普通の義を可_レ用歟」(一七二〇)等の文には一層廣義に於て世間法應用の自由意

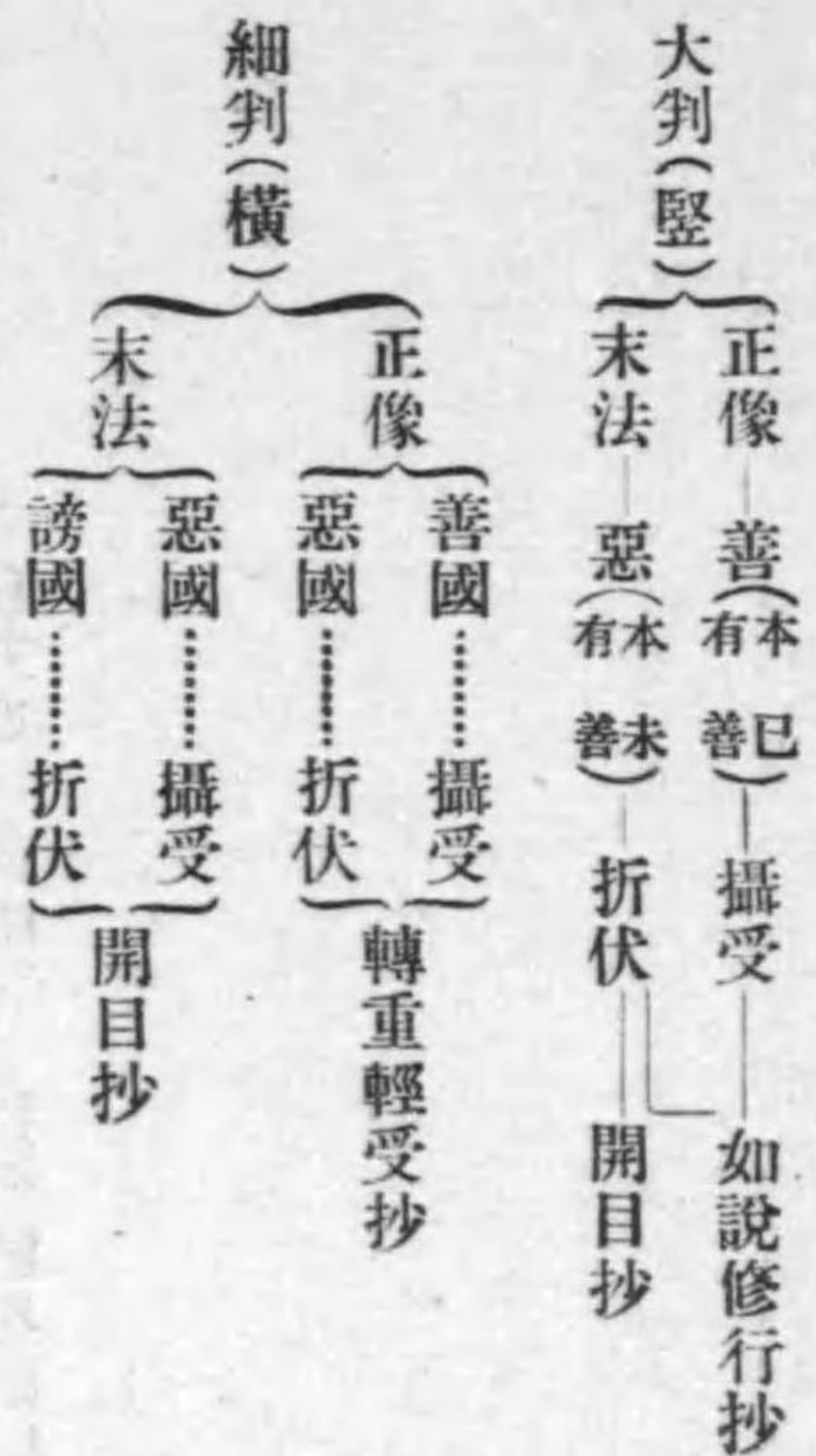
思を拜し、又『檀越某御返事』の「法華經を十二時に行ぜさせ給にては候らめあなかして〱御宮仕を法華經とをばしめせ、一切世間の治生産業皆與_二實相_一不_二相違背_一は是なり」(一七一八)等と云へる文の如きは更に一層廣義に於ける世間法開會の文にして亦分修三學の助證とするに足らん。而して本經の典據は諸處に散在すと雖も別しては『分別功德品』滅後五品の位を明す中の第四兼行六度の文也、即ち「況復有人能持_二是經_一兼行_二布施持戒忍辱精進一心智慧_一其德最勝無量無邊(中略)疾至_二一切種智_一是也。難者云く末法の機は初品又は初二三品に局り後二品には關せず云云、答云く別しては然り通じては然らず、何となれば本經滅後五品の位を明す段其時代を指摘して一般に「惡世末法時」と云ふが故也。要之末法澆季の機は是多分初二三品也と雖も、未だ必ずしも四五の別機なきにあらず、況んや僧侶の如きは固能化の大任を擔ふ者豈初二三品に甘んじて可ならんや、奮て四品五品の後位に進むべき也「堪者可然」等の祖訓實に肝に銘すべし、末法の初宗門艸創の時猶此訓あり況んや今や末法の中期且つ近時文運隆盛三育獎勵の事實に往昔の比に非ず、我徒豈に本門の三學に固執して漫に普通の三學を度外して可ならんや、須く本門三學の信念を堅固にし更に進んで一般の三學をも精勵して修德顯現の大果王佛冥合の宏業を成就せずんばあるべからず。若夫本門三學の信念無き不信謗法の輩の如きは假ひ普通の三學を修するも遂に是墮在三途の徒のみ今の所論に非ざる也。然るに今三學を分て二となし敢て其勝劣進退等を判ずるは固よりは一往相對の義のみ、若し再

往絶對の義に至ては我が本門三學の外別に普通の三學あるに非ず、普通三學即ち別頭三學なる也、例せば前の受持一行論と正助二行論との關係の如し、今は且く相對の義に就て本門三學に次で別に分修三學を辨ずる也。又分修三學と云ふも且く多分に約して云ふ、實は少分正修三學の上根上機無きに非ず、則ち經文に第五品正行六度の人有る所以也、異解すべからず。

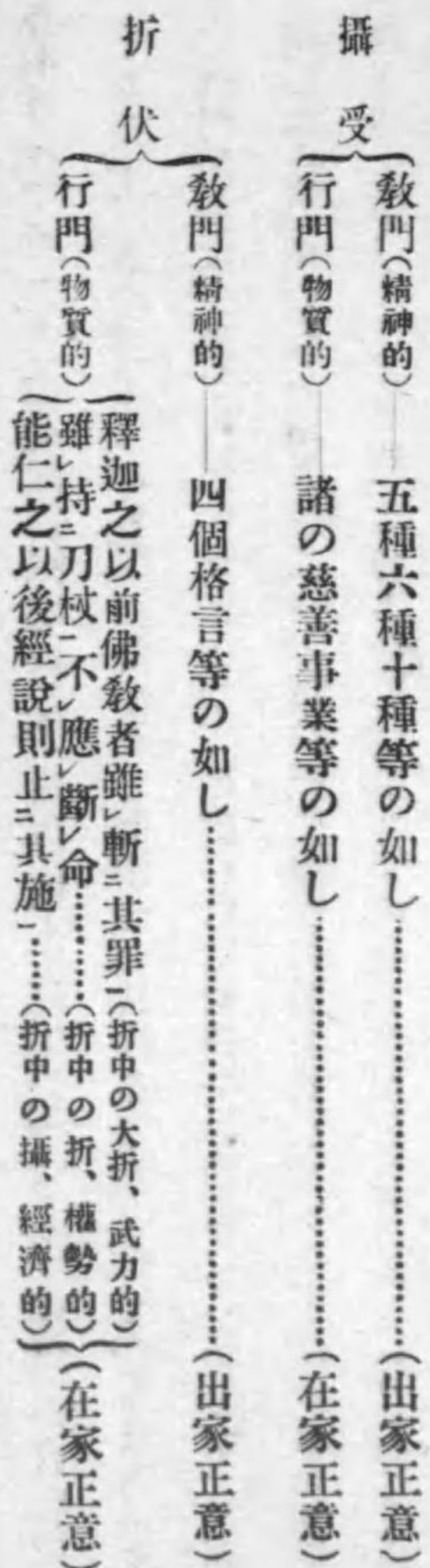
第四項 攝折二門

『如說修行抄』に云く「凡佛法を修行せん者は攝折二門を可知也一切の經論不出此二也」(九七〇)等と、蓋し攝折二門は化他修行の要道也、必ず知行せずんばあるべからず。攝受とは攝取容受の義(大悲門)、『法華經』安樂行品に「不說他人好惡長短(乃至)隨問爲說」等と云ふ如きは是也、折伏とは折破屈伏の義(大悲門)不輕菩薩の「凡有所見則以大乘而強毒之」と云ふ如きは是也、此二門は例せば文武兩道を以て世を治め(佐渡御書八二八)父母の嚴愛を以て子を教育するが如し、弘教者も亦然り、或時は布施・愛語・利行・同事の四攝法を以て衆生を攝受し、或時は外小權迹等を折破して妙法を説て下種結縁せしむべし。『勝鬘經』に云く「我得レ力時於彼彼處見此衆生應折伏者而折伏之應攝受者而攝受之何以故以攝受折伏故令法久住」等と、亦以て二門の名義を知るべし。正依の祖判略して七あり、一に『聖愚問答抄』(五七二) 二に『轉重輕受抄』(六九三) 三に『開目抄』(八二〇) 四に『佐渡御書』

(八二七)五に『富木御書』(八三六)六に『觀心本尊抄』(九四八)七に『如說修行抄』(九七〇)是也(必非)今且く義門明白の文のみを分別せば粗左の如し。



又次に教行分別を示さば粗左の如し。



「觀心本尊抄」に「當知此四菩薩現折伏一時成賢王誠責愚王、行攝受一時成僧弘持正法」(九四八)とある中、攝受僧とは即ち御自身のことを仰せられたるものにして即ち教門の折伏に當るべし、蓋し教門の折伏を以て行門の折伏(賢王)に望むれば尙攝受の傾向なるが故也。我祖日蓮末法の初に出興し本化の新宗教を開き給ふや、偏に攝受退嬰の風を嫌ひて大に折伏進取の態度を取り給ふ則ち大獅子吼して言く念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊・諸宗無得道墮地獄の根源・法華獨一の成佛と、或は言く設ひ信心あり智慧あり德行あらんものも若し謗法者を見て呵責し驅遣せずんば是佛法中怨の敵成佛思ひもよらずと、或は言く我不愛身命但惜無上道身を死して謗法の者を折破すべし然れば即ち十方の佛前に生せんと、四度の大難數知れぬ小難の如き亦實に我祖強折の結果たらずんばならず、斯くて我祖は自ら折伏の權化にてをせしと同時に逆化折伏を以て一宗弘通の方軌と定め給ひたり、是蓋し末法は五濁亂漫邪法猖獗の時代也、此時に當て無上の妙法を強て下種結縁せしめんとす、豈に折伏を主張し給はずして可ならんや、是實に毒鼓結縁(涅槃經)因謗墮惡必由得益(文句會本記二十八五三)の意匠也、我祖豈に辯難攻撃を好み給はんや、蓋し止むを得ざれば也。然るに折伏に重々の種類あり、而して我祖専ら權實相對の折伏を行ひ給ふ所以は、蓋し末法の初多分執權謗實の徒又は權實雜亂の徒を以て充たされたれば也、然るに今や末法の中期に入りて既に三百六十二年(大正三年)時勢一變してまた往昔の比にあらず、今は則ち執俗謗眞執外謗佛の時也、則ち専ら西

洋の科學哲學を以て我宗教を誹謗し新來の基督教等を以て我佛教を破壊しつゝある時代也、然れば則ち現代の折伏は宜しく内外相對を主とすべし。且又内は宗門の發展と共に機は種熟脫を兼ね、外は萬國開放蠻地惡國の傳道も亦必要あり、豈只折伏のみを專にせんや、然も天下の大勢は邪見惡思想甚だ旺盛にして正法の命脈將に絶えなんとす、豈亦攝受のみを專にせんや。然るに若し宗徒にして設ひ少しく教學に志すも徒に遊戲雜談に耽りて攝折何れをも履行せざる者の如きは是方外の闡提畜盜法師の譏(松野御書一五三〇)豈に免るべけんや、又若し設ひ護法の志あるも或は只頑強にして折伏に執し或は徒に軟弱にして攝受に流るゝが如きは是決して二門の中正を得たるものにあらず、又若し設ひ攝折宜しさに適ふも時國相應の道を知らずんば亦以て如說修行の徒と云ふべからず。要之、今時は大體折伏正意攝受傍意の方針に基き、布教傳道を精勵し、以て破邪顯正化他成佛の大事を全ふせんことを要す。尙委しくは前に摘示せる御書の要文及び「本化攝折論」等を見よ。(尙弘經の方軌に就ては、三軌、四法成就、四悉檀等の法門あり、今は總て之を略す)

第五項 行學 一 道

我祖云く「行學の二道を勵み候へ行學絶へなば佛法はあるべからず我も致し人をも教化候へ行學は信心よりをこるべく候」(諸法實相抄九六四)と。偕行學二道とは行道と學道とを云ふ、行道とは實踐

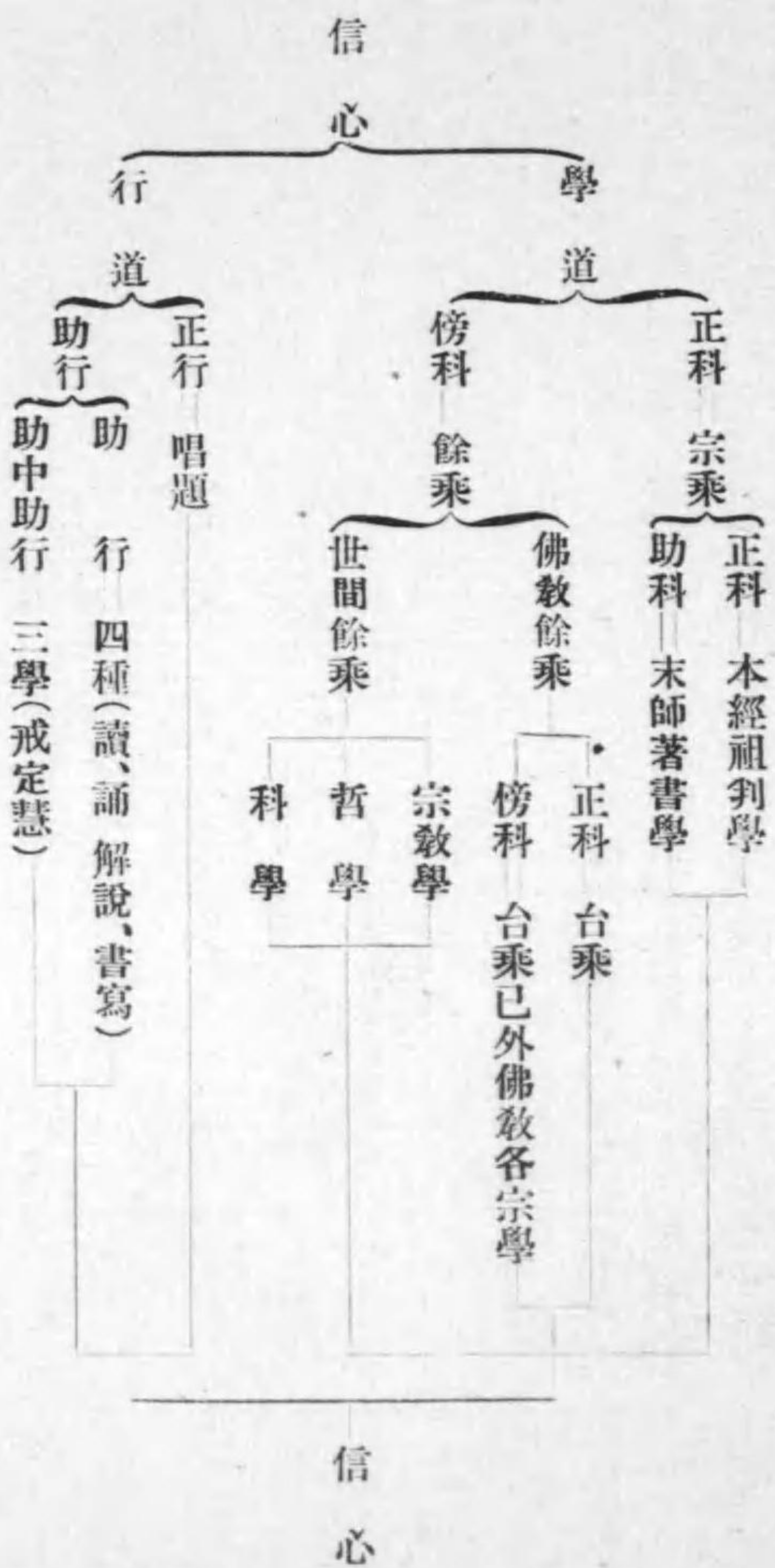
的の修行を云ひ學道とは理論的研究を云ふ、凡世出世間の法廣漠也と雖も蓋し此二道を出でず、抑我宗の行學たるや若し絶對に之を言はゞ唯一乘の妙行妙學のみにして二も無く亦三も無しと雖も若し相對に之を言はゞ正助傍正等に分別せらるべし。初に學道を大別して二とす。曰く正科と傍科と也、正科の學道とは正意の學問にして即ち宗乘學(略して宗乘又は宗學と云ふ)を云ふ、本經祖判を中樞とせる日蓮宗教義の研究是也。傍科の學道とは傍助の學問にして則ち餘乘學(略して餘乘又は餘學と云ふ)を云ふ、宗乘已外の世出一切の諸學を概稱す、之に又二あり、佛教餘乘世間餘乘是也。佛教餘乘とは俱舍・唯識・華嚴・眞言・禪・淨土・眞・天台等佛教各宗の教學を云ふ。世間餘乘とは佛教各宗學已外の諸學を云ふ、之に又三あり、宗教學、哲學、科學是也。宗教學とは今且く佛教已外の諸宗學を云ふ、神道學・基督教學・波羅門教學・回々教學・猶太教學及び所謂宗教學(近代的等是也)。哲學とは支那の老子教・孔子教・孟子教・莊子教等(乃至)西洋の新舊諸哲學是也。科學とは數學等の唯理的科學、博物學・物理學・化學・天文學・地質學・地理學等の自然科學、歴史的科學等是也。此餘乘中に於て天台學は我外相承の祖たる天台・傳教等の教學にして我宗乘と密接の關係ある必修の學問なるが故に古來准宗乘として取扱はれたり、又科學は近代の物質的文明の要素として現代人の日用缺くべからざる普通學也。次に行道を分て又二とす、曰く正行と助行と也、正行とは正意の修行にして即ち唱題を云ふ、南無妙法蓮華經の題目を絶唱する事是也。助行とは傍助の修行にして讀・誦・解說・書寫の四種の修行、戒定慧の三學

(但し實行方面の)布施・持戒・忍辱・精進・一心・智慧(但し實行方面の)の六度等是也。此行學二道を自行化他に配せば學道は多分自行にして行道は通じて自他に亘るべし、則ち唱題讀誦等は自行が主にして解説布施等は化他が主也。若し破立を言はゞ行道は専ら道を立て身を治めんが爲なれども、學道は必ずしも然らず、殊に彼の邪宗敵論の教學を研究するが如きは全く破邪の爲にして得道の爲にはあらず。若し機根を言はゞ正行の唱題と正科宗乘の一分は一般の利鈍に通ずれども、其他の助行と傍科等は堪へたらん利根に局りて分に行學すべく鈍根には及ばざる也。(五種修行三學六度參照)次に用心を述べば正法の道人須く二道相資の所以、正助の次第及び信心爲本の大義を悉知せずんばあるべからず。初に二道相資を言はゞ、學は恰も目の能く物を視て善惡醜美等の差を識別するが如く、行は恰も目の視たる所に從ひて親しく足を運ぶが如し、若し唯行あつて學なくば則ち暗し恰も足ありて而も目なきが如けむ、學あつて行なくば則ち危し恰も目あつて而も足なきが如けむ、由來暗證の禪師は無學の觀よりて出で、文字の法師は無行の學より出づ、俱に眞正の法器とするに足らざる也、此を以て我宗は行學並び具へ理事相資けて文字暗禪の二過を離れ、所謂「智目行足到清凉池」の妙宗を建立して末代の軌範となす、「行學絶へなば佛法はあるべからず」の聖語良に所以ある也。次に正助の次第を言はゞ正科正行は恰も正食(飯)の如く傍科助行は恰も副食物(菜)の如し、若し一朝其正助傍正の名分を誤らんが忽ち脾胃を傷ひ健康を害せん也、若し宗徒にして正行の唱題を輕視して餘

行を専修せば還て墮獄の業因となりん、若し學徒にして本經祖判の宗乘を正修せずして餘乘餘學に流れんか、遂に天魔外道の伴侶たらん『十八圓滿抄』に云く「總予弟子等如我修行正理給智者學匠之身為墮地獄何詮可有乎」(二〇〇九)等と、當家に最も接近せる台家に墮する罪過尙如此、況んや他宗に墮落し外道に墮落し世學に流るゝの罪過豈重且大ならずとせんや、警めざるべけんや。殊に宗門の寺院は即ち専ら行道の中心、宗門の學校は即ち専ら學道の本府、兩者相俟て眞正なる行軌學則を制定し、以て天下教界の爲に絶好の摸範を示さずんばあるべからず、若し然らずんば感化救濟の聖業宗門教育の振興得て望むべからざる也。然るに行學の二道は更に信心を以て根本基礎となさんことを要す、何となれば信心は最も健全なる行學の原動力竝に歸着點として實に二道の始終を一貫する生命なるが故也、「行學は信心よりをこるべく候」の祖訓良に所以ある也。要之我徒は須く祖師の學風を仰ぎ行道を則とし、其正鵠を誤らざらん事を努めざるべからず、然るに若し二道相資を知らず、正助を顛倒し、信心を度外せんか、何のしか能く自行を成就し化他を満足することを得んや。若夫我等能化者毎日の行儀細則の如きは位の初後、根の利鈍等によりて各人別々に制規せざんばあるべからずと雖も、且く其摸範として祖師の行狀を示せば『宗祖一期行儀記』(日向)に「大聖人凡一期行儀難詳記、毎日所作早旦入持佛堂讀誦法華一卷二十日十卷畢亦初至終、其後向日天子讀誦方便品壽量品等要品二時計也、日中法門談義、日夕同音讀誦方便品壽量品、其外晝夜朝暮無

懈怠也」(文中唱題の事を記さざるは蓋し正行)と行學の道人須く鑑みずんばあるべからず。

△行學二道と信心との關係略圖

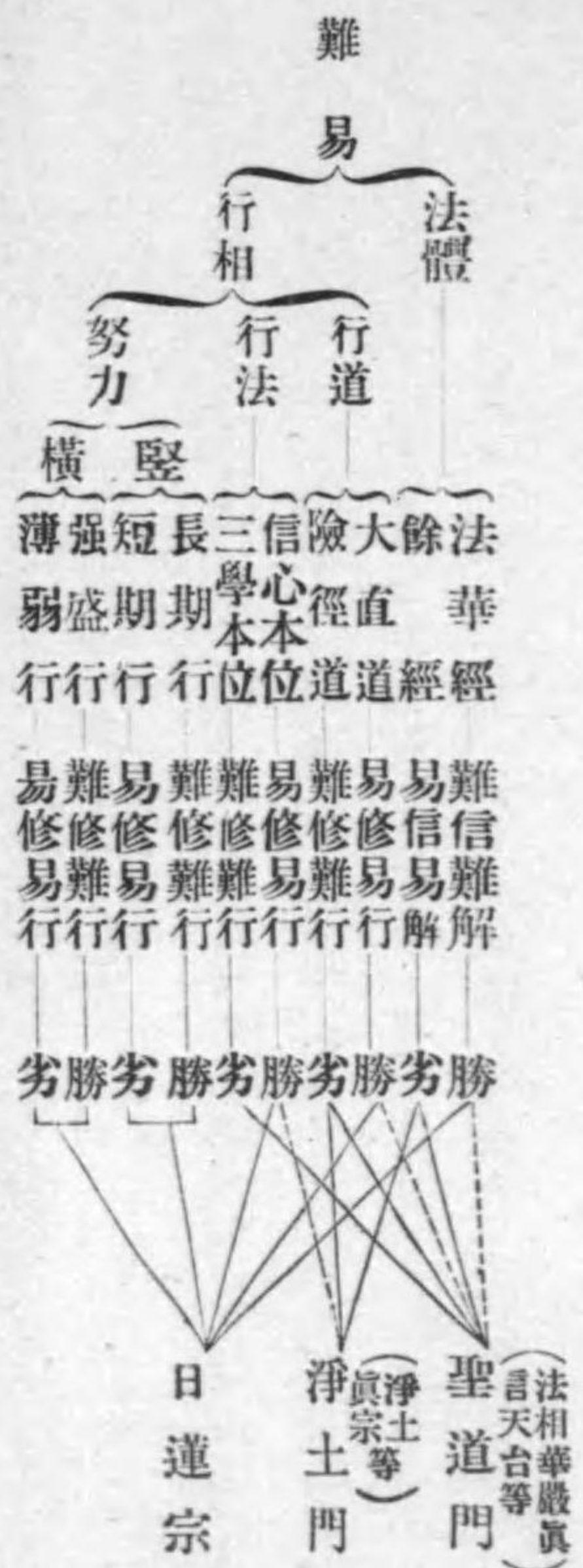


第六項 難易勝劣

難易勝劣の問題を辨ずるに二義あり。(一)に法體に約し(二)に行相に約す、(一)に法體に約せば

法華經は難信難解の法也、隨自意極說なるが故也、例せば金剛石は希有難得なるが如し、「方便品」に云く「難解難入」又云く「第一希有難解之法」等、「法師品」に云く「我所說經典無量千萬億已說今說當說而於其中此法華經最爲難信難解」等是也。餘經餘宗は易信易解の法也、隨他意方便の法なるが故也、例せば土塊は得易きが如し、經文の典據は前に反例して知れ。(一)に行相に約するに又三義あり、(1)に行道に約し(2)に方法に約し(3)に努力に約す。(1)に行道に約せば法華經は易信易解の道也、圓融正說の大直道なるが故也、例せば都會の大路は往來し易きが如し「無量義經十功德品」に云く「行大直道無留難」等是也。餘宗餘經は難修難行の道也、不融曲說の險徑道なるが故也、例せば山間の小路は往來し難きが如し、同品に云く「行於險徑多留難」等是也。(2)に方法に約せば法華經の信念本位の妙行は易修易行の法也、平易に即身成佛の目的を達せらるゝが故也、例せば乗車乗船の旅行は容易なるが如し「法師品」に云く「一念隨喜乃至須臾聞之即得究竟阿耨多羅三藐三菩提」等、「分別品」に云く「若聞是經而不毀譽一起隨喜心當知已爲深信解相」等とは是也。餘經の三學本位の修行は難修難行の法也、容易に成佛の目的を達せられざるが故也、例せば徒歩の旅行は困難なるが如し、餘經には一念隨喜の成佛は全く迹を絶する也。(3)に努力に約せば之に又堅横の二義あり。堅義を言はゞ長時永久の修行は難修難行にして優等也、成功多大なるが故也、例せば大學の卒業は困難なるが如し。短時一時の修行は易修易行にして劣等也、成功

僅小なるが故也、例せば小學の卒業は容易なるが如し、御書に受易持難(四條書一〇九四)火行者劣水行者勝(一〇日向記)等と云へるは是也。次に横義を言はゞ不惜身命等の修行は難修難行にして優勝也、成功偉大なるが故也、例せば優等の成績は得難きが如し。薄志弱行の修行は易修易行にして劣等也、成功少量なるが故也、例せば平凡の成績は得易きが如し、御書に弱信不成、強信成佛(身延書一三〇五、五箇御器抄)又は去易就難丈夫心也等と云へるは是也。但今此努力に約する義は宗内相對にして他の自他相對の義と同じからず。要之本宗は法體に約しては難信難解の妙法を取り、行道に約しては易修易行の妙道を取り、方法に約しては易修易行の妙信を取り、努力に約しては寧ろ難修難行の妙行を取る也、されば單に難道を事とする聖道門或は單に易行を誇りとする淨土門と大に相違することを知るべき也。



第三節 行位

妙法の本體は元來平等無差なりと雖も人の行用に高下勝劣あるが故に唯一妙法上更に階級位次を立てざるべからず、譬へば虚空に丈尺無けれども飛ぶ人によりて高下廣狹あり、大海は無邊なりと雖も入る者によりて遠近淺深あるが如し。今本經「分別功德品」に依りて略して五位を示さん、即ち五品弟子の位是也、五位とは第一隨喜品、第二讀誦品、第三說法品、第四兼行六度品、第五正行六度品也。

第一隨喜品の位とは、佛滅後惡世末法の時に當り、若し四衆ありて釋尊の因行果徳の二法を具足せる南無妙法蓮華經の題目を見聞して、而も不信謗法の邪念無くして隨喜渴仰の正心を起す位にして、未だ四種乃至三學六度の諸行を修せずと雖も、自然に其功徳を受用し、名字凡夫の當體即ち妙覺果滿の境界に到らんとする位也。經に云く「又復如來滅後若聞是經而不毀謗一起隨喜心當知已爲深信解相」等とは是也。

第二讀誦品の位とは、既に隨喜渴仰(受持唱題)の正行ある上更に進んで讀誦妙經の助行を修し、初品よりも一段進歩せる位也、此人は未だ解説乃至三學六度の諸行を修せずと雖も、自然に亦此等の功徳を具備して更に佛道を増進する也。經に云く「何況讀誦受持之者、斯人則爲頂戴如來阿逸多是善男子善女人不須爲我復起塔寺及作僧坊以四事供養衆僧」等とは是也。

第三說法品の位とは、既に隨喜渴仰(受持唱題)の正行ある上更に進んで他に對て說法教化し及び讀誦書寫を修し、初二品よりも一層進歩せる位也、此人は未だ三學六度の諸行を修せずと雖も亦自然に此等の功徳を具備して更に大に佛道を増進する位也。經に云く「如來滅後若有受持讀誦爲他人說若自書若教人書供養經卷不須復起塔寺及造僧坊供養衆僧」等とは是也。

第四兼行六度品の位とは、既に隨喜渴仰(受持唱題)の正行あり四種の助行ある上更に進んで事相の三學六度の諸行を分修し、初二三品の者に勝ること甚大にして、將に疾く妙覺果滿の境界に登らんとする位也。經に云く「況復有人能持是經兼行布施持戒忍辱精進一心智慧其徳最勝無量無邊(乃至)疾至一切種智」等とは是也。

第五正行六度品の位とは、此位は三學即信心六度即妙法の境界にして則ち受持正行及び四種修行に並べて正しく三學六度の諸行を全修する也、此人は最勝なる法華經の行者にして殆んど妙覺果滿の佛境界に安住する聖者なれば一切の人々に恰も佛の如く恭敬禮拜せらるべき位也。經に云く「若人讀誦受持是經爲他人說若自書若教人書(五種)復能起塔及造僧坊供養讚歎聲聞衆僧亦以百千萬億讚歎之法讚歎菩薩功徳又爲他人種種因緣隨義解說此法華經(布施)復能清淨持戒(持戒)與柔和者而共同止忍辱無瞋志念堅固(忍辱)常貴坐禪得諸深定(禪定)精進勇猛攝諸善

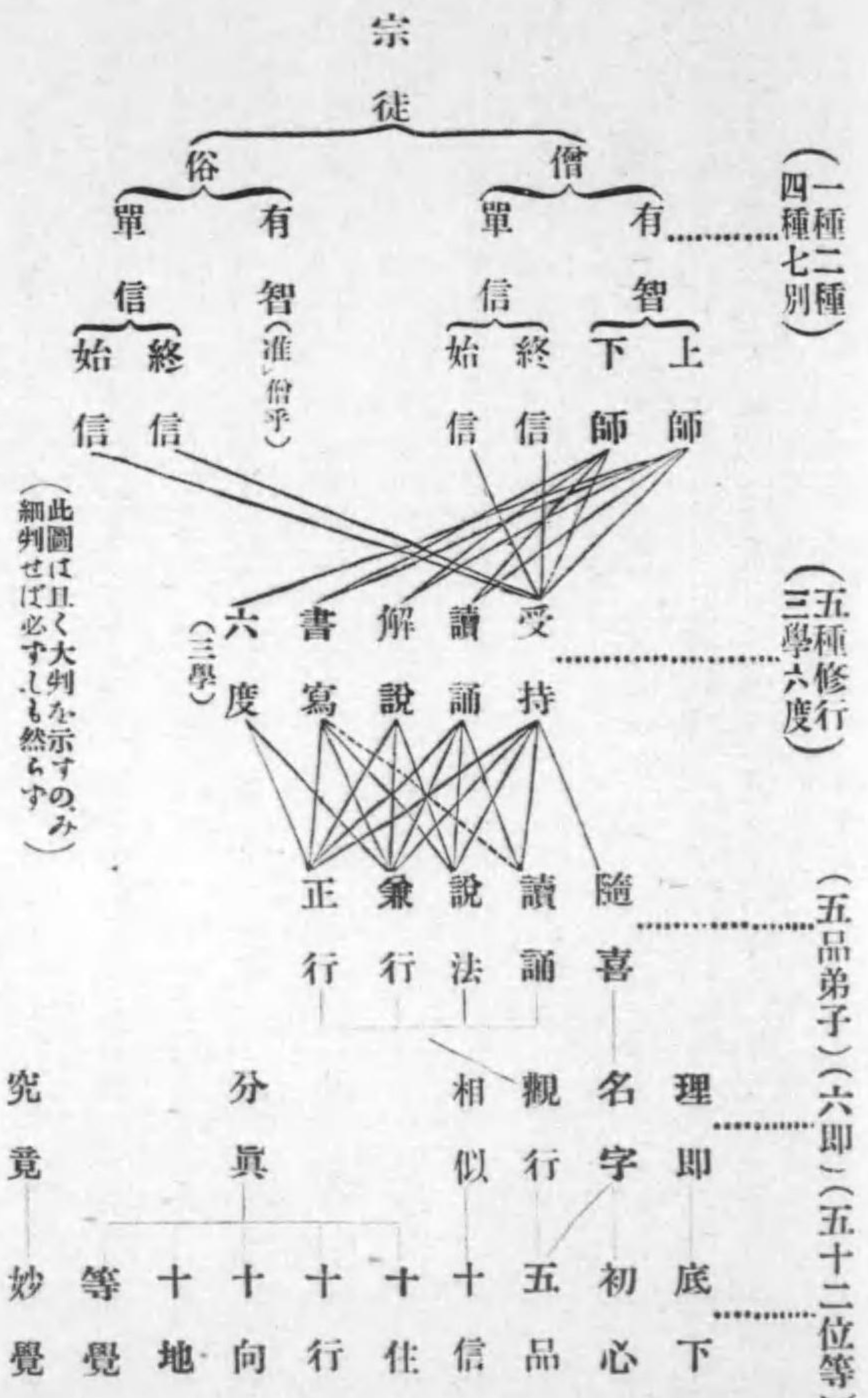
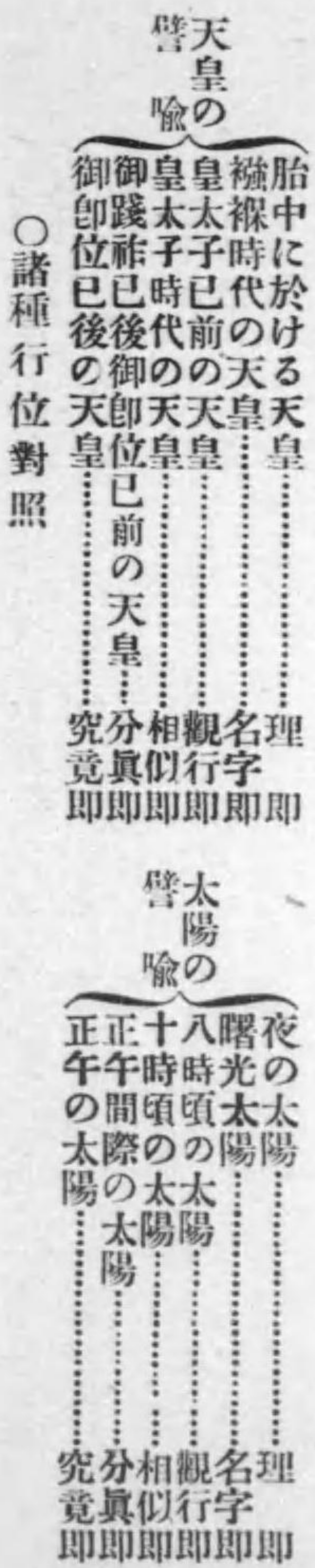
法(補進)利根智慧善答問難、(智慧)阿逸多若我滅後諸男子善女人受持讀誦是經典二者復有如是諸善功德當知是人已趣道場近阿耨多羅三藐三菩提一座道樹下阿逸多是善男子善女人若坐若立若經行處此中便應起塔一切天人皆應供養如佛之塔等とは是也。

以上五品は總じて本宗の行位なりと雖も別しては第一隨喜品の初位が(名字即)末法の正意なるが如し、蓋し、初品は本因妙の最初即身成佛の第一歩なるが故なるべし、襜褕の王兒初生の龍子之を思へ。されば本經には更に『隨喜功德品』を開きて特に此位を詳説し、我祖は『四品五品抄』等至る所に(國家論、唱題抄三二五、受職法門抄、顯佛未來記)御自身始め末法の通機を判じて名字の凡夫初隨喜の者と定め而も其功德の偉大なることを稱揚し給へり。『四信五品抄』に云く「分別功德品四信與五品修行法華之大要在世滅後之龜鏡也、判釋云一念信解者即是本門立行之初云云、其中現在四信之初一念信解與滅後五品第一初隨喜此二處一同百界千如一念三千寶篋十方三世諸佛出門也」(一五三八)等と、具には往て全文を拜せよ。然るに此初品正意の義は且く時機に約して其最低級を定め給ふのみ、若し宗教の目的佛祖の本意に約せば寧ろ高級後心の位を尊重し正意とせざるべからざる也、若し然らずんば佛に二品以上徒らに立つる咎あり、祖に向上發展の進路を無視する失あらん、されば『得受職人功德法門抄』(八四二)には、法華の受職灌頂の位(即身成佛の人)を分て僧俗の二とし、又更に各單信無解と有解有信とに分ち、又復更に有解有信の僧を淺學寡聞(下師)と廣學多聞(上師)とに分

ち、而して在家出家の名分を糺し初心後心の優劣を判じ悉さに一宗行者の位次を判じ以て初心を策勵し更に後心を稱揚し給へり。蓋し彼の『四信五品抄』は偏に末法の通機たる初心の爲なるが故に「專持題目不雜餘文尙不許一經讀誦何況五度等とて一向に信心を主張し給ひ、此抄は末法の別機たる後心(最蓮坊等)の爲なるが故に「解行受職の比丘は無智の道俗の功德を具するのみならず已が修學解行と作法受得の受職と又利他の功德と此等の功德を取集めて一身に具する故に勝と云ふ也」等とて大に有智有徳を力説し給ふ。若夫御書中往々(最蓮坊御書八四〇等)末代法華の信者を指して妙覺の佛三身圓滿の如來等と稱揚し給ふは即ち名字即究竟凡夫即極即身成佛の圓旨に基きたる義にして蓋し彼の最低級(名字即又は理即)説に反して最高級説を示し給ふのみ、各據一義取捨宜しきに從ふべし。然れば則ち名字即の判位を見るも決して卑屈ならざれ、是妙覺に即するの名字なれば也、又妙覺佛の判位を聞くも決して上慢なる勿れ、是名字に即する妙覺なれば也。然るに『御義』には更に六即の配立あり、云く「六即配立の時は、此品の如來は理即の凡夫也(是一)頭に南無妙法蓮華經を頂戴し奉る時は名字即也其故は始て聞く所の題目なるが故也(是二)聞き奉て修行するは觀行即也此觀行即とは事の一念三千の本尊を觀ずる也(是三)さて惑障を伏するを相似即と云ふ也(是四)化他に出ずるを分眞即と云ふ也(是五)無作三身の佛なりと究竟したるを究竟即と云ふ也(是六)」と又以て本宗の妙位は決して名字初心に局せず又究竟後心に限るべきものにあらず、廣く六即等を以て分別

すべきことを知るべし。若し六即廢立の義の如きは要するに證道一如の邊には之を廢し教道差別の邊には之を立つべきのみ。須く二義雙用して一向にすべからず。又若し五品並に六即位次に於ける台當の相違は要するに彼は十乘觀法（理觀）法行本位我は信念唱題（事觀）信行本位、又彼は觀行即（五即）を起點とし分眞即（別して初住）を終點とす、我は名字即（初學）を起點とし究竟即（妙覺）を終點とす、難易勝劣豈に日を同うして論ずべけんや。要之本宗の行位は若し之を絶對に論ずれば名字又は妙覺の唯一佛位に歸着すべしと雖も、若し相對に之を判ずれば千差萬別無量の階級に分つことを得べし、然れども若し之を概括せば五品弟子・道俗信解・六即配立等即是本宗の行位なりと云はるべき也。願は宗徒須らく單信無解の低位に甘んずることなく、妙行を策勵して速に智德兼備の高位に登り、以て自覺覺他覺行圓滿の大果を成就せんことを期せよ。尙試みに六即の譬喩並に諸種行位對照の圖を作れば粗左の如し。

○六即譬喩



第四節 總結

恭しく所觀の心相たる本門本尊に向ひ奉り敬んで能觀の心相たる本門題目を唱へ奉る時は、則ち

當に己身は即無作三身の覺體にして全體三世十方法界に周徧し常同常別にして(法身觀)而して終日法界の功德を受用し(報身觀)終日法界の群類を利樂す(應身觀)と觀すべし、是を事觀の妙行と謂ひ又陰入境を觀すと爲す。如此觀念唱題する時は直に開悟する者あり或は開悟せざる者あり、若し開悟せざる者も妙行を修して止まず怠らざる時は則ち此妙行に激動せられて必ず宿習を發し、或は煩惱起り或は病患起り或は業相發し或は魔事障を作し或は禪發し或は所見起り或は上慢起り或は二乗の心念等前後錯雜鱗沓滔滔として而して起る、然りと雖も或は之を觀じ或は之を顧みず一心專念に行住坐臥を擇ばず唱題修行するときは則ち菩薩の心念も亦起る、是前に比すれば善と雖も而も未だ美と爲さず、故に亦復之を顧みず至心強盛に唱題し分に隨て讀誦乃至三學等の助道を修め志念力堅固なるときは、則ち三障四魔も撓す能はず五塵六欲も染る能はず、終に佛陀の知見を開發し三身圓滿の大果を感じ、廣く群生を導て國土を嚴淨し自他共に安く同く常寂に歸せん。是を須く事觀の要旨行者の所期と爲すべし。南無妙法蓮華經。

第八章 證得佛果

第一節 總述

南無妙法蓮華經の信念決定して本化大聖の安心立命と一致し以て本佛極果の境界に自受法樂する

とを得る是を本宗の證得佛果とす。『當體義抄』に云く「正直捨方便、但信法華經、唱南無妙法蓮華經、人煩惱業苦、三道法身般若解脫、三德轉三觀三諦即一心顯其人、所住之處常寂光土也、能居所身土色心俱體俱用無作三身本門壽量當體蓮華佛者、日蓮弟子檀那等中事也、是即法華當體自在神力所顯功能、敢不可疑之、不可疑之」(九九一)と。文に「正直捨方便、但信法華經、唱南無妙法蓮華經人」とは則能成の人たる法華の行者を擧ぐる也、「煩惱業苦、三道法身般若解脫、三德轉三觀三諦即一心顯」とは正しく法華行者の即身成佛の状態を示す也、「其所住之處常寂光土也」とは成佛の人の所居が娑婆即寂光の妙土たることを示す也、「能居所身土色心俱體俱用無作三身本門壽量當體蓮華佛者」とは能く娑婆即寂光の妙土に居する所の即身成佛の人の靈格を明す也、「日蓮弟子檀那等中事也」とは能成の人を結ぶ也、「是即法華當體自在神力所顯功能、敢不可疑之」等とは則ち證得佛果の要素たる法力佛力の不思議を明して偏に妙法の信力を勸進し不信謗法を誡め給ふ也。今略して證得佛果の要義を述べれば左の如し。

第二節 即身成佛

即身成佛は本宗妙行の所詮也、信者須く悉知せずんばあるべからず。總じて之を言はゞ我等苟も本果の妙境たる本門觀心の本尊に歸命して本因の妙智たる本門觀心の題目を受持すれば自ら境智冥

合感應道交して、則ち我等凡身に即して智徳圓滿の佛身を成就し自他共に安く同く娑婆即寂光の妙土に快樂娛樂せん、是を即身成佛の行因得果の要領とす。而して即身成佛と云ふは行人に約するの立名也、若し修行に約せば受持成佛と云ひ、若し行意に約せば信念成佛と云ひ、若し行相に約せば唱題成佛と云ひ、若し觀心に約せば事の一念三千の成佛と云ひ、若し宗旨に約し法體に約せば妙法成佛等と云ふ也。今諸義を分別すれば略して左の如し。

(一) 權實成佛

即身成佛に權教の成佛と實教の成佛とあり。權教の成佛とは則ち爾前權經に依る華嚴眞言等の他宗の成佛を云ふ。謂く他經他宗の成佛は設ひ名は即成と稱するも彼々の依經には記小久成の大事無く、所詮一念三千の成佛を明さざるが故に有名無實の成佛也、故に權教方便の成佛として捨つる也。實教の成佛とは則ち唯獨り法華經に依れる法華宗の成佛を云ふ、謂く今經は記小久成の大事顯れ一念三千の原理明瞭なるが故に有名有實の成佛也、故に實教眞正の成佛として取る也。「開目抄」に云く「提婆達多は一闍提なり天王如來と記せらる(乃至)善星阿闍世等の無量の五逆謗法の者一をあげ頭をあげ萬ををさめ枝をしたがふ一切五逆七逆謗法闍提天王如來にあらはれ了ぬ毒樂變じて甘露となる衆味にすぐれたり、龍女が成佛此一人にはあらず一切の女人の成佛をあらはす、法華已前の諸小乘經には女人成佛をゆるさず諸大乘經には成佛往生をゆるすやうなれども或は改轉の成佛一念三千の成佛にあらざれば有名無實の成佛往生なり、舉一諸例と申て龍女成佛

は末代の女人の成佛往生の道をふみあげたるなるべし」(八〇三)等と。又「即身成佛抄」に云く「華嚴眞言等の人々の即身成佛と申候は依經に文は候へども其義はあいてなき事なり僻事の起是也、弘法慈覺智證等は此法門に迷惑せる人なりとみ候、何況んや其已下古徳先徳等は言にたらず(二七二)即身成佛の根本たる法華經をば指をいてあとかたもなき眞言に即身成佛を立て剩へ唯の一字(菩提心論に云く唯眞言法中即身成佛故是說三摩地法於諸教中固而不書)ををかる、條天下第一の僻見也此偏脩羅根性法門なり(中略)即身成佛の義はあへてうかがわぬ人々(眞言の不空等)なり、いかに候へば二乗成佛久遠實成を説給經にあるべき事なり(二七四)等と。佛教徒たる者須らく先づ成佛の權實を知らずんばあるべからず。

(二) 理事成佛

實教の即身成佛に又二あり、理具成佛と事具成佛と也。理具成佛とは凡夫の理性に具する佛性を一心三觀の理觀を以て修顯し以て佛身を成就するを云ふ、是迹門の義にして台家の成佛也。次に事具成佛とは我等の事相に本具する佛體を信唱本尊の事觀を以て修顯し以て佛身を成就するを云ふ、是本門の義にして當家の成佛也。而して若し因果に約せば彼は從因至果の成佛、我は從果向因の成佛也、又若し覺義に約せば彼は始覺門の成佛、我は本覺門の成佛也。「妙一女御返事」に云く「即身成佛と申す法門は世流布の學者は皆一大事とたしなみ申事にて候ぞ、就中予が門弟は萬事をさしをきて此一事に可留心也、建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間在在處處にして申宣たる法門繁多なりといへども所詮は只此の一途なり(二九八)夫先法華經の即

身成佛の法門は龍女を證據とすべし、提婆品云於須臾頃一便成正覺等云云(乃至)又法華經の即身成佛に二種あり迹門は理具の即身成佛本門は事の即身成佛也、今本門の即身成佛は當位即妙本有不改と談ずるなれば肉身を其まゝ本有無作の三身如來と云る是也、此法門は一代諸教の中に無之(中略)尙尙即身成佛者迹門は能入の門本門は即身成佛の所詮の實義也、迹門にして得道せる人人種類種相對種の成佛何れも其實義は本門壽量品に限れば常にかく觀念し給へ正觀なるべし(一九八二)等と、當に知るべし台家迹門理具の成佛は未究竟の談道にして眞の實教法華經の即身成佛にあらず、亦以て末法今時の所用にあらざる事を。

(二)内外成佛

本宗の即身成佛に内證成佛と外用成佛とあり、内證成佛とは未だ外相に大用を顯さざれども三力不思議の力を以て我等の内心に佛身を證得するの謂也。外用成佛とは但に我等が内證に如來を宿すのみならず更に進んで現實に三德具備の靈格を光顯し所謂三十二相八十種好の相好を養成し三智五眼十力四無所畏の大能を發揮するもの是也。『一念三千法門』に云く「此妙法蓮華經者我等が心性總じては一切衆生の心性八業之白蓮華の名也、是を教給ふ佛の御詞也、無始より以來我が身中の心性に迷て生死を流轉せし身、今此經に値ひ奉て三身即一の本覺の如來を唱るに顯れて現世に其内證成佛するを即身成佛と申す、死すれば光を放つ是外用の成佛と申す來世得作佛とは是也」(二一〇)等と。但し此書は佐前なるが故に十分の意義顯れず、則ち外用成佛は即身成佛に

非ざるに似たり、然るに佐後の御書たる『灌頂抄』(一〇二九)『妙一女抄』(一九六七)等の文を以て還て此文を照すに外用成佛も亦即身成佛に屬する也。而して所謂無智の妙覺不解の釋尊の如きは内證成佛の人、教主釋尊の如きは外用成佛の至極せる人、我祖及び古聖先賢の如きは其中間に位する者也。若し其價值を論ずれば勿論内證は劣等にして外用は優勝也と雖も、若し末代の時機に約して其傍正を論ずれば内證成佛を以て正意とする也。

(四)現當成佛

若し更に時間的に成佛を論ずれば現世成佛と未來成佛との二義あり、初に現世成佛とは則ち今生に於ける成佛を云ふ、多分は是内證成佛也、次に未來成佛とは則ち死後に於ける成佛を云ふ、是多分は外用成佛を期待するも實には其目的を達するものは希れなるべし、『藥草喻品』に「現世安穩後生善處」とあるは現當成佛並び挙げたる也、『法師品』に「須臾聞此速得究竟阿耨多羅多藐三菩提」等と云ひ『壽量品』に「大火所燒時我此土安穩天人常充滿」等と云ひ『神力品』に「即是道場」等と云は現世成佛の邊にして『方便品』に「諸法從本來常自寂滅相佛子行道已來世得作佛」等と云ふは未來成佛の義也、『提婆品』に於ける龍女成佛は即ち現世成佛の模範提婆成佛は即ち未來成佛の標本也、『灌頂抄』に云く「慇懃の行者は分段の身を捨てても即身成佛捨てずしても即身成佛也」(二〇九二)等と、『妙一女御返事』に云く「教大師は分段の身を捨てても捨てずしても法華經の心にては即身成佛也、覺大師の義は分段の身を捨つれば即身成佛にあらずともはれたるかあへ

て即身成佛の義をしらざる人人也」(一九六七)等と、『上野抄』に云く「生てをはしき時は生の佛今は死の佛、生死ともに佛なり、即身成佛と申す大事の法門これなり」(一〇五〇)等と、『最蓮房御書』に云く「此受職を得るの人争か現在なりとも妙覺の佛を成ぜざらん若し今生妙覺ならば後生豈に等覺等の因分ならんや」(八四〇)等と、其他現當並び明し給へる祖判擧るに違あらず。然るに若し現當の輕重を論ぜば、一往時間の長短に約すれば未來成佛は永久なるが故に重く、現世成佛は短時なるが故に輕きが如し、又果報の轉變の難易に約すれば亦現世成佛よりも未來成佛を要とすべし、何となれば現在の果報は大體過去の業因によりて定れば容易に轉ずべからず之に反して未來の果報は専ら臨終の一念によりて即轉(斷滅又は改轉にあらす)し易きが故也。然るに若し三世中心必在(現在)の原則により又日蓮は本果(未來的)よりも本因(現在的)を主とす(日向記)との聖意、又『立正安國論』の「先安(生前)更扶(没後)」等の聖訓により、又即の字は三世一貫の圓即なるも殊に現在に親しき道理より考察せば須く未來成佛よりも現世成佛を以て近要とすべきか、然れども決して未來成佛を度外すること勿れ(然るに宗内に於て近時現世主義を過重するの結果、即身成佛は現世成佛に局りて未來成佛は即身成佛にあらすとするもの尠からず、蓋し不相傳の僻見と云ふべし)要之本宗の即身成佛は通じては現當二世互に輕重ありと雖も、別しては未來成佛よりも現世成佛を以て一宗の主眼と爲すべき也。教徒必ず迷ふこと勿れ。

(五)三種成佛

絶対に成佛を論ぜば唯一にして二も無く亦三も無しと雖も、若し相對に之

を論ぜば且く三種の不同あり、一には當體即佛二には受持成佛三には顯徳成佛是也。初に當體即佛とは具には當體無作の成佛と云ふ、謂く凡夫自身の當體即ち本覺無作三身の如來にして三世常住也と觀するもの是也、或は之を自覺成佛とも云ふ、『總勘文抄』に云く「是故我身本覺三身如來身體也周(遍)法界(一)一佛徳用一切法皆是佛法也説給時列(其)座席(諸)四衆八部畜生外道等不(漏)一人(皆)悉(妄)想僻(目)僻思立所散止還(本)覺(寤)皆成(佛)道(佛)如(寤)人(衆)生如(夢)見人(故)醒(生)死(虛)夢(還)本覺(寤)即身成佛(平等)大慧無分別法皆成佛道(云)(一八九七)等とは是也。次に受持成佛とは具には受持妙法の成佛と云ふ、謂く既に我身は本覺無作三身の如來也と自覺し、更に其功徳を光顯すべく本因の妙法を受持し任運に妙覺の果を分顯するもの是也、『觀心本尊抄』に云く「釋尊因行果徳二法妙法蓮華經五字具足我等受持此五字(自然讓與彼因果功徳)」(九三八)等と、又『初心成佛抄』に云く「一度妙法蓮華經と唱れば一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神乃至地獄餓鬼畜生脩羅人天一切衆生の心中の佛性を唯一音に喚顯し奉る功徳無量無邊也我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉て我が己心中の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯れ給處を佛とは云也(中略)されば三世諸佛も妙法蓮華經の五字を以て佛に成給し也三世の諸佛の出世の本懷一切衆生皆成佛道の妙法と云は是也、是等の趣を能得心得て佛になる道には我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべき者也」(二六九二)等とは是也。後に顯徳成佛とは具には修徳顯現の成佛と云ふ、謂く

既に已に我は久遠の本佛也と自覺し、而して更に信念唱題の妙行を以て分に如來の事を成じ、復更に進んで修學解行して漸次に本有の三徳を光顯し、以て自覺覺他覺行圓滿の大果を實現するもの是也、此は是最上乘の成佛也、『受職功德法門抄』に云く「無智道俗自成佛計功德無利他之功德一例如第五十人無師徳無智道俗亦復如是少分雖有利他徳劣法師品之下品師況上品師耶（中略）問何故修學解行之受職比丘功德勝無智之道俗功德耶、答解行受職比丘無智道俗功德を具するのみならず已修學解行與作法受得之受職又利他之功德之功德此等功德取集其一身故云勝也」(八四六)等とは是也。然るに初の「は體の成佛にして後の二は用の成佛也、用の成佛中にも前者は初歩の成佛後者は高等の成佛也。要之我等は先づ當體即成を自覺して受持成佛に進み更に顯徳成佛の大涅槃を成就せざるべからざる也、然れども若し末法の通機に約して其傍正を論ずれば受持成佛を以て正意とすべき歟。(行位分別参照)

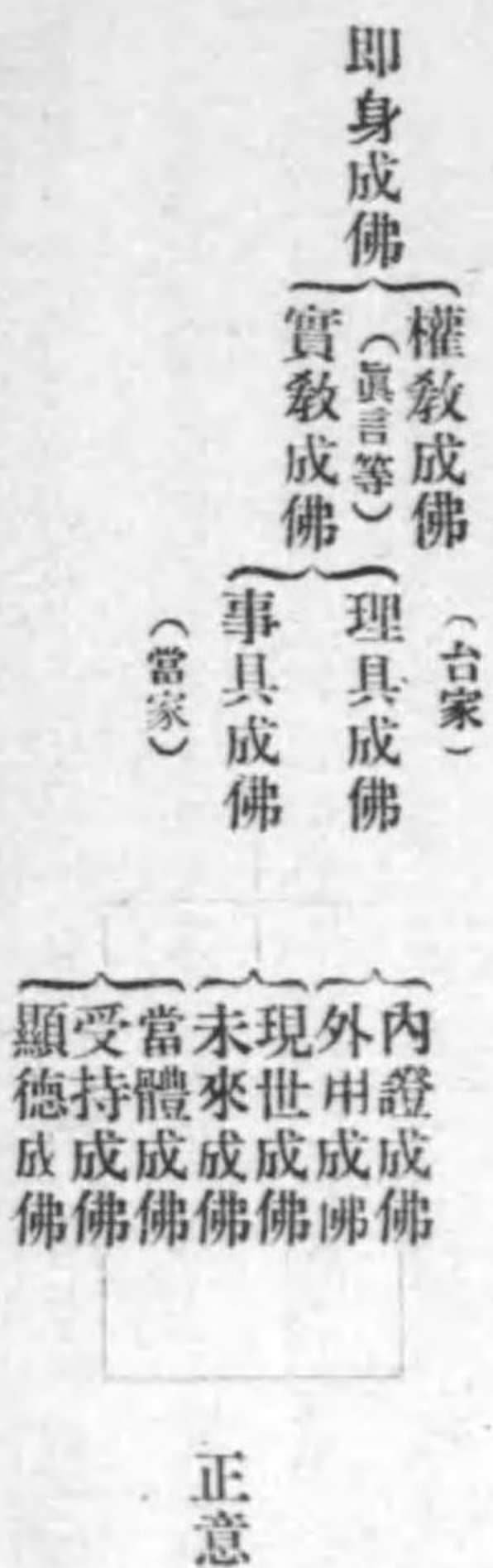
(六)依正成佛

廣義に成佛を論ぜば更に依正の成佛あり、曰く依報成佛と正報成佛と也。

正報の成佛とは有情(動物人類)の成佛にして通説也。依報の成佛とは非情(植物礦物)の成佛を云ふ。圓宗の教理は一念三千依正不二有情非情悉皆成佛と談するが故に正報の有情にして成佛せば亦依報の非情も成佛すべしと立つる也。然るに依報の成佛たる草木國土の成佛を許さずんば木畫二像の本尊を信敬し奉ること無益也、『草木成佛口決』に云く「問云情非情共於今經成佛乎、答云爾也、問云

證文如何、答云妙法蓮華經是也、妙法者有情成佛也蓮華者非情成佛也、有情は生の成佛、非情は死の成佛、生死の成佛と云が有情非情の成佛の事也」(七四五)等と、『觀心本尊抄』に云く「草木之上不置色心因果一木畫像奉持本尊無益也」(九二九)等とは是也。要之此法門は本尊造立の基礎的教義にして亦娑婆即寂光の法門と密接の大關係ある也。尙「一念三千法門」(二一〇)等必拜。

其他即身成佛に關する義門甚多し、則ち煩惱即菩提と云ふが如きは心法に約する義也、生死即涅槃と云ふが如きは色法に約する義也、煩惱業苦三道轉法身般若解脫三徳と云ひ凡夫即極等と云ふが如きは色心二法に約する義也、一切衆生皆成佛道と云ふが如きは正報に約する義也、娑婆即寂光と云ふが如きは依報に約する義也、無智の妙覺不解の釋尊信仰即解脫等と云ふは名字即下種の成佛に約する義也、毒鼓結縁因誘墮惡必由得益と云ひ若逆或違終成佛道等と云ふは逆縁成佛に約する義也、十界皆成と云ふが如きは總じて法界三千に約する義也、其他個人的成佛・國家的成佛・世界的成佛等の義あり、具に擧ぐるに遑あらず。



(七)佛陀一多

成佛既に一多不定なれば佛陀も亦一多不定なるべし。則ち若し一に約せば

佛は唯妙法蓮華經如來の一佛也と云ふべし、若し多に約せば無量の種類あるべし今且く十種を擧げん。一に娑婆應身歷史佛、是は三千年の昔中印度に降生せられたる世界の教主三徳有縁の釋迦牟尼佛也。二に木書二像造立佛、是は非生現生非滅現滅の現身佛を戀慕渴仰の餘り木像等に造立圖顯したる假定佛也。三に久遠實成本覺佛、是は釋迦應身の本地身十方三世諸佛の本師たる五百塵點最初爲本の古佛也。四に十方三世分身佛、是は久遠本佛より垂迹せる十方三世の分身諸佛也。五に一念三千即是佛、是は一念三千觀心の原則に基き我等の己心即ち佛陀なりと觀ずる義也。六に受持妙法名字佛、是は釋尊の因行果徳を具足する題目を信念する行者即ち名字の佛也と信ずる義也。七に修徳顯現究竟佛、是は受持妙法の因に更に進んで萬善萬行を修行して妙覺果滿の大智大慈を光顯する者也。八に三世常恒始覺佛、是は善因善果惡因惡果本來法爾三世常恒苦樂昇沈自由にして而も權現出沒自在の佛也。九に所作佛事不識佛、是は士農工商等の眞正なる所作は平等利益の所作なれば不知不識の間に佛の事行を成すもの也との義也。十に本來法爾自然佛、是は法界の全體無作三身即一の活佛也との義也。所詮一も亦足れり無量も亦多からず、具眼の者は之を察せよ。

第三節 娑婆即寂光

能居の身凡身に即して佛身を成ずるならば所居の土亦凡界に即して佛界を成ずる也、之を娑婆即寂光と云ふ。娑婆とは印度の語にして譯して忍土と云ふ此人間界のこと也、此界は生老病死寒熱飢渴等の諸苦を忍耐すべき國土なるが故に斯く名くる也。寂光とは具には常寂光と云ふ、佛境界にして最勝無上の世界也。常とは常住と云ふことにて此世界凡夫の所見を以てすれば生滅無常の様に見ゆれども實には無始の昔より無終の末迄盡きることなき常住不滅の世界也と也。寂とは寂滅又は寂靜又は寂淨と云ひて、心に煩惱を離れ身に惡業を離れたる人は心身共に安樂清淨の果報を得る故に、其所居の國土も亦安樂清淨の果報を得て、佛陀の住居たる極樂淨土を地上に實現することを得るとの義也。光とは光明とて太陽の光明の全世界を照して明かに障なきが如く佛の知見を開きぬれば天地國土山川草木悉く眞善美の妙無量無邊の功徳を備て其妙用實に不可思議と也。故に向上の大志あるものは速に佛の知見を開きて法界最勝の處たる常寂光の世界に遊ばんと希ふべき也。『最蓮房御返事』に「我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都爲るべし我等が弟子檀那とならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしども申す計り無し」(八四一)等と云へるは我祖が佐渡の配處に即して本有の寂光を語られたる微妙の聖語也。又『四條金吾殿御消息』に「今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ流罪は伊東死罪は龍の口相州の龍の口こそ日蓮が命を捨たる處なれば佛土に劣るべしや其故はすでに法華經の故なるが故也…

若然らば日蓮が難にあう所ごとく佛土なるべき歟、娑婆世界の中には日本國日本國の中には相摸の國相摸の國の中には片瀬片瀬の中には龍の口に日蓮が命をとめをく事は法華經の御故なれば寂光土ともいふべき歟神力品に云く若於林中若於園中若山谷曠野是中乃至而般涅槃とは是也」(六九〇)等と云へるは我祖が龍の口の斷頭に即して寂光の佛國を講讀せられたる有聲の文字也。又「南條兵衛七郎殿御返事」に「此處(身延山)は人倫を離れたる山中也東西南北を去て里もなしかかるいと心細き幽窟なれども教主釋尊の一大事の祕法を靈鷲山にして相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てりされば日蓮が胸の間は諸佛入定の處也舌の上は轉法輪の所喉は誕生の處口中は正覺の砌なるべしかかる不思議なる法華經の行者の住處なればいかでか靈山淨土に劣るべき法妙なるが故に人貴し人貴きが故に所尊と中は是也」(二〇六九)等と云へるは亦我祖が棲神の幽山身延に即して靈山淨土の樂園を光讀し給へる美妙の靈筆也。經に云く「常在靈鷲山及餘諸住處衆生見劫盡大火所燒時我此土安穩天人常充滿園林諸堂閣種種寶莊嚴寶樹多花果衆生所遊樂諸天擊天鼓常作衆伎樂雨曼陀羅華散佛及大衆」(壽量品)等。以上は現世に於ける娑婆即寂光の義也、然るに此の娑婆即寂光の語に執して未來に於ける寂光極樂世界の實在を疑ふこと勿れ、何となれば現在の華報に於てすら尙寂光あり況んや未來の果報に於てをやなれば也、則ち「松野殿御返事」に「但在家の御身は餘念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱候て最後臨終の時を見させ給へ妙覺の山に走り登り四方を御覽せよ法

界は寂光土にして瑠璃を以て地とし金の繩を以て八の道をさかひ天より四種の花より虚空に音樂聞え諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にそよめ給へば我等も必ず其數に列ならん法華經はかかるいみじき御經にてをはいませ候」(二六三六)等と云ひ、又「波木井殿御書」に「日蓮は日本第一の法華經の行者なり日蓮より後に來り給ひ候はば梵天帝釋四大天王閻魔法皇の御前にて日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乗て通給べし此法華經は三途の河にては船となり死出の山にては大白牛車となり冥途にては燈となり靈山へ參る橋也靈山へましまして良の廊にて尋させ給へ必待奉るべく候」(二二一四)等と云へるは一般の信者が臨終後に於ける光榮ある寂光生活の状態を記し給へるもの、又「開目抄」の結文に「日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかはしからず後生には大樂をうべければ大に悦ばし」(八二四)と云ひ又「如說修行抄」の結文に「命のかよはんほどは南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と唱て唱へ死に死するならば釋迦多寶十方の諸佛靈山會上にして御契約なれば須臾の程に飛來て手をどり肩に引懸て靈山へはしり給はば二聖二十羅刹女は受持の者を擁護し諸天善神は天蓋を指し旛を上て我等を守護して體に寂光の寶刹へ送り給へき也あらうれしやあらうれしや」(九七二)等と云ひ給へるは今生に於ける折伏留難の小苦に對して未來に於ける寂光淨土の大樂を渴仰し給ひたる妙文也。聖語深く肝に銘すべき也。南無妙法蓮華經。

第九章 起教對他

上來三祕の妙宗に依て信心の妙行を修し以て即身成佛の目的を達したる者は、更に還て化他起用八萬法藏を演説し、破邪顯正以て法界の群類を導き、自他共に安く同じく寂光の都に遊ばざるべからず、是を證後の起教とす。此起教利物の方面に顯正あり破邪あり約教あり約宗あり、中に就て顯正と約教の方面は粗前の五綱三祕の下に述べたれば、此章に於ては専ら破邪的約宗的方面の一斑を辨すべし。今且く節を分て二とす、一に外道異學を評し、二に佛教各宗を評す。

第一節 外道異學を評す

略して諸の外道異學を概評せんに、其主なるものを且く印度の波羅門教、支那の孔・孟・老・莊の教、西洋の基督教等とす。

波羅門教は所謂月氏の外道にして、佛前八百年前後に出でたる仙人、迦毗羅外道(自性計)濕樓僧伽外道(他性計)勤婆婆外道(共性計)自然外道(無因性計)等の開ける宗教也。其本尊は三目八臂の摩醯首羅天。毗紐天也、其教典は四仙所説の四韋陀六萬藏等也、其主義は要するに人生の煩を厭ひ、天界の樂を希ひ、有漏の戒定を修し、三界の諸天に生れんと欲し、種々なる苦行を爲して涅槃の眞因と信じ、

超人間の快樂を天上に於て永久に保たんとするにあり。佛出世の時代には實に五天を風靡して、支流九十五六種にも岐れたる程也。

孔・孟・老・莊の教は支那に於ける主なる徳教又は哲學也。先づ老子教又は道教と云ふ、老子の立つる哲學也。其原理は虚無の大道是也、其教典は道德經二卷にして老子の著也、其教義は開卷第一に「道可道非常道一名可名非常名」等と言へる如く、人倫道德を超絶して虚無の幽理に冥合し、偏に清淨無爲を喜ぶを以て所詮とす。而して後世宗教化したる所謂道教の如きは畢竟此教の變形したるものに外ならず。

孔子教又は儒道と云ふ、孔子の開ける徳教也。孔子は元老子の門より出でたれども、實は堯・舜及文王・周公等の道を祖述せる也。其根本原理は天命又は仁是也、其經典は四書五經等也、孔子及其門下の曾子子思孟子等の述ぶる所也、其教義は天下を経綸するを以て宗とす、則ち内には仁義道德の名教を設て人倫を明にし、外には禮樂刑政の法度を制して以て綱常を扶持し、以て修身齊家治國平天下天地の化育を賛せんとするにあり。

莊子教は孟子と粗時を同じうして出世したる莊子の立つる所の哲學なり。其第一義は亦無亦有の絶對界是也、其經典は莊子三十三編也、莊子は道家に屬する學者にして其思想は老子孔子の間に相出入す、其學説は要するに道は絶對にして虚無也、是非の論は相對にして枝末也、覺者は須く心を

絶對ならしめ、世の毀譽褒貶に累はされず、以て悠々虚無の大道に遊ぶを旨とすと云ふにあり。其他支那の哲學としては楊子・墨子・荀子・列子等の諸説あれども概して老・莊・孔・孟の教よりも劣ると數等也、今且く之を措く。

基督教又は耶蘇教と云ふ、猶太國に生れたる耶蘇基督の立つる所の宗教也。其本尊はゴット即ち獨一眞神也、其經典は通じては新舊兩約聖書、別しては新約聖書又は舊約聖書也、其教義は神と子(基督)と精靈とを以て三位一體とし、天に於ける神に對する信仰と地に於ける一切人類に對する博愛とを以て此教の二大主義とし、此信仰ある者は死後天國に入ることを得、此無き者は地獄に墮するものなりとするにあり。布教の範圍は殆ど全世界に亘り、分派數十種、主なるものを天主教・希臘教・新教等とす。萬國中佛教に次で有勢なる宗教也。

今略して此等の諸教を批判せんに。先づ支那の老・莊・孔・孟の教の如きは、或は清淨無爲の哲理を示し、或は倫理道德の名教を明し、或は虚無逍遙の大道を説きて、一往人生を益し世界を利するに雖も、堅には但現在のみを教へて過去及未來を説かず、横には但人界に限りて法界の廣大を語らず。其所説は三玄を出せず、一には有の玄・孔・孟の教也、二には無の玄・老子の教也、三には亦有亦無の玄・莊子の教也。未だ道理を盡さず事實を究めざること恰も山男の都を知らず盲人の前後を見ざるが如し。

次に印度の波羅門教の如きは、其所説の深高なること儒道等に似るべくもなし。中には過去未來入萬劫を知るものと雖も、其所説の極理は或は因中有果或は因中無果或は因中亦有果亦無果等也。則ち或外道は五戒十善等を持ちて有漏の禪定を修し上色無色を極めて上界を涅槃と立て屈歩虫の如く向上すれども、非想天より返りて三惡道に墮つ一人として天に留るものなし。然れども彼等は天上を以て永久の樂園と思へり、又或外道は種々の苦行に浮身を籠めて涅槃に入るの正道と思へり。然れども外道の法九十五種ともに世間の苦界を脱する能はず、善惡につけ一人も生死を離れず。善師に侍へては二生三生に惡道に墮ち、惡師に侍しては順次生に惡道に墮する也。

又歐米の基督教の如きは、一往文明教たるに似たりと雖も、實には未だ眞理の實相を明さざる未開教たることを免がれず。則ち其ゴッド世界創世記の如きは因果の法則に戻るの妄説なるのみならず、其單一的神教の本尊觀の如きは頗る偏狭なる愚説近くは我が國神とも衝突する邪想にして取るに足らず。又兩約聖書の如き漠然として神に對する信仰と人に對する愛とを我等に強ふるものにして何等哲學的眞理の根底を有せず。況んや一教の生命たる獨一眞神の如き、與へて之を見れば只一の救主梵天王たるに過ぎず、奪て之を論ぜば本體不明の空想神ならくのみ、安ぞ如此淺薄なる宗教を以て法界の一切を濟度し萬國の王民を教化することを得んや。

其他日本の神道の如きは、我等國民の大切なる祖先教として最も敬意を表せざるべからざるもの

なりと雖も、其所依の經典の如き殆ど皆無にして亦組織せられたる教義なるもの無し、全く宗教又は徳教の體を爲さず。而して後世宗教化したる所謂神道諸派の如きは一種の變形教たるに過ぎず、如何ぞ之を以て日本乃至萬國を教化せん一大宗教とすることを得んや。又マホメットの回々教の如きは外國に於ては多少の勢力ありと雖も、其宗義は遂に基督教と大同小異にして、到底優勝なる宗教と云ふべからず、豈に亦論ずるに足らんや。

其他歐米の賢哲たるソクラテース(希臘)プラトーン(同)アリストートル(同)諸氏の古代哲學、カント(獨逸)ヘーゲル(同)スピノザ(和蘭)諸氏の近世哲學等の如きは、總括的知識を以て宇宙萬有の全般に亘りて、其本質を定め其目的を究め以て人生に光明を與へんと努力せるものなれども、未以て究竟の學說と云ふべからず、安ぞ人生の總を利導することを得んや。

又近代的科學の如きは、實驗的組織的に確實なる知識を教へ、吾人日常の生活に向て多大の便利を與へ、總じて物質的文明に貢獻する所尠しとせざる有用の學術なりと雖、只是部分的知識に止まりて人生の全體を指導するものにあらず、假ひ物質的發展の基礎を爲すべしと雖も精神的進歩に貢獻するもの尠し。且夫宗教を無視し佛教を度外する科學者の如きは返て亡國墮獄の大惡人のみ、警めざるべけんや。

若夫劣等自然教たる天然物崇拜・動物崇拜・兇物崇拜・精靈崇拜・庶物崇拜・英雄崇拜・偶像崇拜等の

如きは、何等經典なく教祖なく、又道德的哲學的意義を有せず、此等は皆野蠻未開の宗教にして亦論ずるに足らざる也。

第二節 佛教各宗を評す

由來佛教は釋迦一佛の創設する所なれども、後世人師の祖述的佛教に至りては多種多様の宗旨分立して其歸一する所を知らざるもの、如し。今佛教各宗を大觀するに大別して二とす、曰く正系派曰く邪系派也。初に邪系派とは一往佛教の假面を被りつゝ而も釋尊の眞意を誤り世を教へ人を救はんとして返て人を毒し世を悪化する僞佛教を云ふ、則ち爾前權教に執して開宗せる澄觀凝然等の華嚴宗、鑑真良觀等の律宗、玄奘道昭等の法相宗、達磨道元榮西等の禪宗、金剛智不空善無畏弘法等の眞言宗、曇鸞道綽善導法然等の淨土宗、親鸞の眞宗、嘉祥道朗等の三論宗等の諸宗は開宗の最初より誤謬の宗派なるが故に邪系派と斥ふ也。次に正系派とは釋尊の付囑により又は正しく佛の眞意に基き正しく世を導き人を救へる眞佛教を云ふ。此に又二あり、過時の佛教と應時の佛教也。(但し法を本位とす)而して過時の佛教とは即ち正像の正系佛教にして必ずしも法華實經のみに依るに非ず。應時の佛教とは即ち末法現代の佛教にして必ず法華實經に依れる宗門也。先づ迦葉阿難等の小乘佛教、龍樹天親等の權大乘佛教、天台傳教等の迹門實大乘宗等は、並に正像當時に利益ありしと雖も、今

末法に於ては恰も去曆昨食の如く救済力を失ふが故に過時無用の死佛教と貶せらるゝ也。而して我日蓮大士唱導の本門實大乘教のみ末法現代適應の佛教にして一切人類の信奉すべき唯一宗教也、粗前章に述べしが如し。今將に佛教各宗を批判せんに、初に別して四個格言を辨じ、次に總じて諸宗を評し、後特に台當の同異を述べん。

第一項 四個格言

四個格言(四大格言)は、我祖大聖人が本師釋尊より別囑せられたる、捨權立實佛教統一の大任を果すべく、主なる權門諸宗に對して、不惜身命に絶叫せられたる、法華折伏の名言にして、當に當時の格言に止らず亦萬代不易の憲教也。四個格言とは念佛無間・禪天魔・真言亡國・律國賊是也。此四大破言は互に通ずと雖も且く其主張する所に敵對して正反對の破言を用ひ給ひし也。則ち念佛宗は念佛往生を主唱して法華即成の妙義を無視するが故に墮落無間の破言を用ひ、禪宗は謂己均佛を骨張して釋尊の聖經を蔑如するが故に天魔波旬の破言を用ひ、真言宗は鎮護國家を誇揚して法華經王の妙義を度外するが故に亡國邪法の破言を用ひ、律宗は戒律國寶を標榜して一乘法華の國土を犯すが故に國賊邪教の破言を用ひ給へる也。

(一) 念佛無間論

念佛無間とは略言也、南無阿彌陀佛を念唱して極樂往生を願ひ、法華真實の佛法を誹謗は、遂に無間地獄に墮落すべしと也、此宗の祖師は淨土宗の曇鸞・道綽・善導・法然等、真宗の親鸞・蓮如等是也、其宗典は『淨土三部經』及び『往生論』『往生論註』『安樂集』『觀經疏』『選擇集』『教行信證』等是也。何故に念佛宗は無間なりや。謂く略して五由あるが如し、(一)には教主の選定を誤解するが故也。此宗の立義に云く、我等末代の衆生の唯一救主は西方極樂世界の阿彌陀如來にして釋迦は畢竟在世五十年又は正法時代の教主に過ぎず等と。然るに如此説は彼等が臆説にして全く道理現證文證に違背せる暴論也。先づ道理及現證に叶はざることを言は、若し彌陀佛が彼等の所立の如く一切衆生、本師別して末法有縁の佛なれば何を釋尊の如く此娑婆世界に出で、八相成道の儀式を整へ以て救主たるの態度を明示せざるや、現界に應生せざるを以て知るべし、彌陀は在世滅後を論せず全く娑婆世界の救主に非ず從て我等が爲には無縁の佛なることを。次に文證を言は、彌陀佛末法救主説の如きは一切經に明文無く亦意義無し。但し淨土三部經に於ける唯一救主阿彌陀如來の文の如きは、其當時極度の厭世觀に打たれたる惡逆阿闍世の母韋提希夫人等の一機一縁の者に對する應急的一時の方便説に過ぎず、豈一般の爲又は末法の爲の施設なりとせんや。然るに一般の爲め特に末法の爲の唯一救主は教主釋尊自ら出世の本懷たる法華經本迹二門に於て唯御自身一人に限ることを明言せられたり、則ち『譬喻品』の「今此三界皆是我有(主德)其中衆生悉是吾子(親德)而今此處多諸患

難唯我一人能爲救護」(師德)の語は近く三徳有縁救主一人の文にして、『壽量品』の「每自作是念以何令衆生得入無上道速成就佛身」の語は亦釋尊の久遠已來乃至盡未來際に至る大慈大悲無限の救済力を示し給ふ文也。斯くて我が釋尊は根本總統の本佛娑婆有縁の唯一救主にして吾人が絶對の信仰を捧げざるべからざる佛陀なるに、彼の彌陀は枝葉分局の迹佛娑婆無縁の他佛にて本來此土の衆生とは何等關係を有せざる佛也。然るに彼宗の徒善導・法然・親鸞等の迷信邪見に誑惑せられて偏に他方無縁の阿彌陀佛を本尊とし敢て三徳有縁の釋尊を蔑如すること甚し。例へば自己の父母を疎外して他人の父母に親近し、自國の皇帝に反逆して他國の國王に内通するが如し、豈に不忠不孝誹謗正法の大惡人に非ずして何ぞや。(二)には機法の關係を謬解するが故也。此宗の所立に言く、法華經等の聖道教は設ひ法は深遠なりと雖も三學爲本自力成佛の難行道の説なるが故に、在世及正像の上機には或は有用なりと雖も、今末法の下機には全く用を爲さず、所謂理深解微とて法理は深遠高尚にして機の解行は微弱劣等なるが故也、然るに彌陀三部は設ひ法は淺近なりと雖も偏に他力往生の易行を説くが故に末代の下機に相應せりと。斯くて曇鸞の『往生論註』には難行易行の二行を分ち、道綽の『安樂集』には聖道淨土の二門を立て善導の『觀經疏』には難行正行の二行を立て、法然の『選擇集』には淨土三部已外の諸經を捨閉閑抛せよと漫言し、親鸞の『教行信證』には頓證漸證の二證を立て、同じく『淨土和讃』には聖道權假の方便に衆生久しく留りて永く流轉の身とぞなると云ふ

が如き龜語を吐けり。如斯種々の破立を試みたるも要するに機法の關係に迷惑せる者に過ぎず。抑末法下劣の衆生を救済せんには必ず最勝の教法に依らざるべからず、譬へば輕病には凡藥にて可なるも重病には必ず妙藥を要するが如し、須く機法の關係は反比例ならざるべからず。されば記小久成の妙教をも説かず一念三千の觀心をも明さざる淺劣の淨土三部經を以て、敢て末法濁惡の下機を救はんとするが如きは、恰も重病者に凡藥を投ずるの愚に非ずや。而して法華經は所化の教益を極め能化の實事を明め本因果の妙觀を顯せる最勝無上の經なるが故に在滅を擇ばず三根を通じて解脱せしむるの妙力あり、特に末法下機を救ふの宗教は唯法華經に限れり、所謂高山の水は幽谷に至り最頂の教は能く下機を救ふもの是也、則ち法師品に「須臾聞之速得究竟阿耨多羅三藐三菩提」等と云ひ、神力品に「應受持此經是人於佛道決定無有疑」等と云ひ、陀羅尼品に「受持法華名者福不可量」等と云ふは竝に一念隨喜即身成佛の文にして、法師品に「吾滅後惡世」等と云ひ、勸持品に「恐怖惡世中」等と云ひ、安樂行品に「於末法中」等と云ひ、分別品に「惡世末法時」等と云ひ、藥王品に「後五百歲於閻浮提廣宣流布」等と云ひ、勸發品に「後五百歲濁惡世中(乃至)於如來滅後閻浮提內廣宣流布使不斷絕」等と云は竝に法華一部末法爲正の證文也。由此觀之法華は所説の法體最勝なるのみにあらず、能用の法力は一念隨喜の功德を許し、所被の時は末世法滅に及び、所被の機は五逆謗法をも納めたり、一切衆生皆成佛道の宗教徹上徹下の妙道亦他に求むべからず、豈法は高

尙なれども時機に適せずと云はんや。然るに彼祖師等近くは所依の三部經に暗く、遠くは一代五時の肝心たる法華經を知らず、末代應時の佛教は百即百生の彌陀三部に限り、法華經等は千中無一未
有得者等とて過時無効の廢教と斷ず、豈無謀邪見の極ならずや。(三)には現當の輕重を顛倒するが
故也、抑我等の所期は通じては現當二世の安樂を欣求するにありと雖も、別しては遠き未來の往生
よりも近き現在の成佛を以て急要とす、何となれば時間を中心は三世中特に現在にあるが故也。さ
れば本經には通じては「現世安穩後生善處」(藥草喻品)等と説くと雖も別しては「大火所燒時我此土安
穩天人常充滿」(壽量品)等と云ひ、「當知是處即是道場諸佛於此得阿耨多羅三藐三菩提」(法師品)等
於法輪「諸佛於此而般涅槃」(神力品)等と云ひ「須臾聞此速得究竟阿耨多羅三藐三菩提」(法師品)等
と云ひ。又祖判には「先安生前更扶沒後」(安國論)等と云ひ「極樂百年の修行は穢土一日の功德に及
ばず正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」(報恩抄)等と云ひ「今本時娑婆世界離三災出四劫
常住淨土佛既不滅過去不生生未來所化以同體是即己心三千具足三種世間」(本尊抄)等と云ひ、「又
命已に一念(現在)に過ぎれば佛は一念隨喜の功德と説給へり若是二念三念(未來)を期すと云はゞ平
等大慧の本誓願教一乘皆成佛の法とは云はるべからず、流布の時は末世法滅に及び機は五逆謗法を
も納たり」(持法華問答抄)等と云て、専ら現世成佛を主張し給へり。然るに彼の淨土三部に於ては一向
に未來の極樂往生を勸獎し、彼々の祖師等は偏に厭離娑婆欣求淨土を骨張し、其弊の極まる所彼れ

善導をして遂に楊柳に縊死せしむるの慘狀を演ず、未來主義の弊害亦知るべきのみ。要之現世は本
にして重く未來は末にして輕しとするは實に佛法の正義天地の公道也、我宗の如きは全く此の正義
公道に順應す。然るに彼淨土教の如きは全く此眞理を無視して現當の本末輕重を顛倒し佛法の正義
を曲解し天地の公道を度外す、豈に大邪見教に非ずや。(四)には別して國家人生を愚弄するが故也、
謂く此宗は未來主義に基き偏に厭離娑婆欣求淨土を唱導するが故に、自ら我が大切なる國家を愚弄
し人生を度外する不忠不倫の大罪を構成することゝなる也、之を我祖の『守護國家論』『立正安國論』
等に於ける國家主義『觀心本尊抄』『諸法實相抄』『三世諸佛總勘文抄』等に於ける人間本位主義『新池
殿御書』(一八四四)『秋元御書』(一九二九)等に於ける勤王思想『神國王御書』(二三四九)『諫曉八幡抄』
(二〇二二)等に於ける日本最勝論等に比較して天地水火の相違あるに非ずや。若夫れ彼の王法爲本の
如き、唯心の彌陀己心の淨土の如き教義は、全く是後末世師の新案にして遠くは所依の經典に本據
なく近くは元祖の判釋に依文なき牽強附會の説ならくのみ、亦何ぞ論ずるに足らんや。然も彼等敢
て自宗を以て國家の宗教と誇揚し人生の光明と稱揚す、豈に國家と人生を愚弄する邪教に非ずして
何ぞや。(五)には依經の選擇を誤解するが故也。抑佛教廣漠なりと雖も眞實を全顯せるは唯法華經
に限れり。彼淨土教の如きは所化の教益も全うせず能化の實義も極めず、時を論ずれば爾前方等の
權説に屬し教を論ずれば四教並説の方便教に攝す。設ひ觀經が法華と同時なるにせよ、三説の校量

を以て論ずれば遂に最第一の經と云ふべからず、其人生を偏に苦觀し空觀し無常觀し無我觀することを教ふるは豈に藏通偏眞の教なる證ならずや、彌陀と衆生と安養と娑婆とを穴勝に隔歴するは豈に別教方便の説なる證ならずや、内容既に圓融究竟の説と云ふべからず何ぞ時の前後を諍はんや、天台判じて四教並説方便の部に屬す良に所以ある也。されば眞實求法弘經の者須く淨土教等の權説を捨て、一乘法華の實説を信すべき也。然るに彼法然親鸞等の輩偏に權教方便たる淨土三部を迷信し唯一實教たる法華經を度外す、誤謬に非ずして何ぞや。而して前の四大謬義の如き亦全く依經の選擇を失ひたるに基因す。此の背法華の罪過を本經の嚴誠に照すに正しく譬喩品の「若人不信毀謗此經乃至其人命終入阿鼻獄」の文に契當す、智度法師云く「問何故謗經(法華)入無間(耶答一乘是極樂經謗極妙法故感極苦處也)」(東春)傳教大師云く「讀者積福於安明謗者開罪於無間」(依憑集)我祖日蓮此に據て念佛無間と折破し給ふ、蓋し已むを得ざるの苦言と謂ふべし。然るに此念佛主義を若し廣義に解せば、總じて世出に於ける背本思想・卑屈心・厭世主義・危險思想・迷信妄想等有害の惡思潮を含有するものなるが故に、到底之が存在を許すべきものに非ず。是我祖該宗を以て此等惡思想の代表として根本的大折伏を加へ以て天下後世に警戒を垂れ給ふ所以也。但し念佛無間とは是極度の破言なるべし、若し泛爾に之を言はば土流墮獄又は淨土無得道等と云ふべき歟。

(二) 禪天魔論

禪天魔とは略種也、詳言せば禪宗は佛法を破滅する天魔波旬の眷屬也と也。禪宗は達磨・惠可・榮西・道元・隱元等の提唱する所也。此宗は何故に天魔也や。謂く(一)には此宗は可說不可說の關係を知らず求法の正路を誤解するが故也。此宗の立義に云く、釋尊一代五十年の諸説は大小權實の擇びなく悉く衆生の迷情に隨順して説く所の閑文字也、眞實の佛法は言を以て宣ふべからず文字を以て傳ふべからず、佛陀の證智は以心傳心の方法に依らざれば受得する能はず、可說は方便なり不可說は眞實也、自己の心性を看破し來るに佛と均くして異あるなし、故に之を直指單傳の妙旨となす。「問佛決疑經」に説あり、佛拈華し迦葉微笑す、此時佛告て曰く「我有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門(教外別傳不立文字)付屬摩訶迦葉」と此禪宗の本據也。夫れ如此宗義を立つるは一往有理なるに似たりと雖も、全く可說不可說の關係を知らざる也。何となれば釋尊法華經方便品の初に説て曰く「我法妙難思不可言宣」と是則不可說門なり、而るに舍利弗等の懇請によりて後に之を宣へて曰く「汝已慇懃三請不止豈得不説汝今諦聽善思念之吾當爲汝分別解說」と是則可說門なり。凡そ諸經に於て不可說の後には必ず可說を開けり、況んや聲字實相一體の妙旨に達するときは文字即解脫の妙あり、佛涅槃經に文字を離れて解脫を説くべからずと言へり。蓋し大慈大智の釋

尊争でか一代五十年の中必ず一度は眞實究竟の佛法を顯説し以て一切衆生の歸依處を萬世に遺し給はざるの理あらんや。されば彼の『問佛決疑經』に於て教外別傳の付囑を受けし迦葉は『法華經』の信解品に來りて明に今昔の領解を陳べ釋尊は之を認め給へり。其大意に云く昔經に於て未得道なりし我等は今經の妙法を聽て始めて得道作佛せりなどと、由此觀之禪宗の教外別傳の本據は第一祖の釋尊第二祖の迦葉(第二十八祖は達磨)に由て其所立を破壊せられたり。況んや壽量品には三度如來の誠諦の語を信解すべしと誠告ありて滔々として如來祕密神通之力の妙法を顯説し給ひ、神力品には如來一切の眞實義は皆此經に於て宣示顯説すと言へり。斯くて佛教の眞理は一代五時の説法中後八個年の法華經に於て遺憾なく顯説し給ひしこと現文赫々亦一疑を容るべからず、但凡師暗師は之を見聞するも容易に其眞理を信解し能はざるのみ、何ぞ釋迦教の總てを以て未顯眞實の方便と捨つべけんや。如何に況んや『問佛決疑經』の如きは眞偽未決にして正依とするに足らず、若又佛説なりと云はゞ禪宗又佛説に依れるに非ずや、自語相違とは是也。(二)には此宗は謂己均佛の邪觀心に墮するが故也。凡そ宗教の神髓哲學の極致は誠に唯佛與佛の境界にして三乘尙自己の智識を以て悟入し難しとす、況んや一般の凡夫に於てをや。されば本師は『法華經』に「汝舍利弗尙於是經以信得入況餘聲聞其餘聲聞信佛語故隨順此經非己智分」(譬喻品偈)等と誠め、『大論』には「佛法大海以信得入」等と説けり、誠に求法見眞の要は己れを空しうして偏に經卷に隨ひ信仰を起すを以て正路

とすべし。而して不立文字の如き以心傳心の如きは、固より求道の一方法たらざるに非ずと雖も、求道の第一義としては頗る危険千萬の方法と謂ふべし。然るに禪徒不立文字以心傳心の邪觀心に據り、偏に理性の佛を尊て己れ佛に均しと思ひ增長慢にして教典を侮蔑し、一向に面壁坐禪を正行として宗教の二大要素たる本尊と信仰を度外するが故に、自ら「未得謂得未證謂證」(方便品の徒輩を以て充たさるゝに至る、而も謂己均佛の慢心高く、其弊遂に聖經を以て髻を拭ひ佛像を焚て暖を取るに至る、併しながら達磨等が偏觀無教の妄想我慢に基くもの也。生きては是天魔の眷屬死しては亦是阿鼻の罪人たらん、『法華經』に云く「憎上慢比丘將墜於大坑」(方便品)又云く「生疑不信者即當墮惡道」(涌出品)『涅槃經』に云く「不隨佛說者悉是魔眷屬」と、我祖日蓮之に依て禪天魔等と破折す。蓋し禪天魔等と云は亦是極言也、若泛爾に之を評破せば禪宗無得道等と云ふべき歟。然るに我祖の禪天魔論の元意は、單に佛教内の達磨宗に對する能破のみに止るにあらず、廣く世出に於ける内觀過重の精神主義、惡平等惡自由思想、我慢放逸等の邪謂惡作等に向て根本的大打撃を下し給ひたるものにして亦萬代不磨の格言也。

(三) 眞言亡國

眞言亡國とは略言也、詳言せば眞言宗は亡國の惡法なりと也。此宗は金剛智・不空・善無畏・弘法等

の立つる所にして『大日經』『金剛頂經』等の密教を依經とし大日如來を以て本尊とす。何故に此宗は亡國なりや、謂く(一)には顯密二教の關係を誤解するが故也。此宗の主張に云く釋迦直説の一切經は悉く迷情に應同して説ける所の戲論(顯教)也、而して大日經金剛頂經等の密教のみ大日如來の自證眞實の秘法にして眞言(密教)也、而して密教と顯教とを比較するに其勝劣天地なりと、弘法は『祕藏寶論』十住心論に法華經を貶して眞言經の下に置き書して言く「如是一心(法華の思想)無明邊域(釋迦の方便説也)非明分域」と如此の義は全く弘法の邪見にして佛教の正義に非ず。抑大日經等を密教として勝れりとし法華經等を顯教として劣れりと云ふこと文證道理俱に無き所也、所詮眞言を密と云ふは隱密の密か微密の密か、凡そ物を秘するに二種あり、財寶等を藏するは微密にして疵片輪等を隠すは隱密なり、微密は尊むべし隱密は賤むべき也。而して彼の眞言を密と云ふは則ち隱密の義也、其故は一代佛教の綱目たる二乗作佛久遠實成を隠して説かざるが故也。而して我が『法華經』は則ち微密の法也『無量義經』十功德品に云く「深入諸佛祕密之法」所可演説無違無失」等と、法師品に云く「此經是諸佛祕要之藏」等と、安樂行品に云く「此法華經如來祕要之藏於諸經中、最在其上」等と、壽量品に云く「如來祕密神通之力」等と、神力品に云く「如來一切祕要之藏乃至皆於此經宣示顯説」等と、此等の文は要するに記小久成等の妙法を説ける經を祕密教と云へる也。且つ眞言の第三祖と稱する龍樹大士は『大論』に「法華を祕密と名く二乗作佛有るが故なり」等と云へり。眞言

經に二乗作佛無きことを云は、『大日經』に云く「佛説不思議眞言相道法不共一切聲聞緣覺亦非世尊普爲一切衆生」と文義知るべし、又久遠實成無きことを云は、『大日經』に「我一切本初」の文は一往久成の説に似たりと雖も、是法身の顯本にして報身應身の顯本に非ず、法華壽量の三身具足の顯本と相隔つること遠し。由此觀之、法華經は至極の顯教にして又眞實の密教也、眞言教は眞實の密教に非ず亦至極の顯教にも非ず、而して眞の密教たる法華經は、眞の即身成佛の教にして偽の密教たる眞言は偽の即身成佛の教也、彼此の勝劣實に天地雲泥の相違あり、されば我祖は法華大日七重勝劣を判じ給へり、所謂「法華經第一涅槃經第二無量義經第三華嚴經第四般若經第五蘇悉地經第六大日經第七」是也、委くは『眞言七重勝劣』(六五二)等を見よ。然るに弘法等漫りに法華經等を顯教なりと捨て第三戲論法華經の暴言(第一大日經等、第二華嚴經、第三法華經、第四般若經等、第五深密經等、第六緣覺教等、第七聲聞教等、第八波羅門教等、第九儒教等、第十無教)を發す、豈下尅上背上下の反逆思想に非ずして何ぞや。(二)には釋迦大日の同異に迷惑するが故也。彼宗の所立に云く眞言經は大日如來の説にして釋尊の説に非ず、而して劣等なる顯教を説ける應身の釋尊は卑賤にして優勝なる密教を説ける法身の大日は高貴也、斯くて釋迦は大日の履取にも及ばず、須く大日を以て本尊とし釋迦を以て本尊とすべからず等と、如斯の義は亦人師の謬見にして佛説に非ず。抑大日如來とは何者ぞや、大日の出世成道利生は釋迦より前歟後歟對機説法の佛は必ず八相成道す、父母は誰ぞ其出生地は何處ぞ。所詮大日には全く八相成道の事無し、知るべし、

此佛は報應二身と即せざる法身佛にして教主たるの資格皆無なることを。況んや一世界に二佛出世無きことは恰も天に二日無く國に二王無きが如くなるに於てをや、是併しながら宗教統一・本尊統一・思想統一・信仰統一の必要を保持せんが爲の佛教の原則たるに外ならず、『涅槃經』卅五に云く「我於處處經中說言一人出世多人利生一國土中二轉輪王一世界中二佛並出無有是處」等と、『大地論』九に云く「十方恒沙等三千大千國土名爲一佛國土是中更無餘佛一釋迦牟尼佛」等と、『持地論』竝に『記』一に云く「世無二佛一國無二主一佛境界無二尊號」等と、當知我が娑婆世界の佛は唯一釋迦牟尼佛なることを。況んや『法華經』壽量品に開迹顯本せられたる釋尊は但に今番此土の教主に止らず、總じて三世十方の諸佛を統一せる絶對根本の本佛なるに於てをや。今且く應迹上に就て更に釋迦大日の同異を検するに、若し大日を以て他土の佛なりと云はゞ何ぞ我が三徳有縁の釋尊を蔑にして他方疎遠の佛を崇拜するや、不忠不孝不倫に非ずや、若釋尊と一體と云はゞ何ぞ別佛と云ふや、若し別佛ならば何ぞ我重恩の釋尊を捨つるや、唐堯は衰へたる母を敬ひ虞舜は頑なる父を崇む、況んや今番乃至久遠劫來三徳具備大慈大悲常に懈倦なく我等一切衆生を救護し給ふ大聖釋尊に於てをや。然るに彼徒漫に一佛世界に二佛を構成し、無縁空想の大日を本尊と崇め、還て有縁現實の釋尊を度外し、枝葉分身の賤佛に執して根本尊重の本佛を知らず、一大佛教の統一を攪亂し一切衆生の正信を動搖せしむ。如斯の邪義は實に破法破佛の因縁なること疑なし、譬へば萬世一系

の神民反逆して、我國の皇帝を捨て種性曖昧なる他國王の牒者となりて、自國の滅亡を謀るが如し。我祖日蓮佛法同契の趣意より考察して眞言は亡國の邪法なりと斷破し給ふ、蓋し當然の評破と謂べし。然るに亡國の破亦極言なるべし、若し穩言せば眞言は興國の教に非ずと云ふべき歟。然るに此格言を廣義に解せば、但に獨り佛教内の眞言を破するに止らず、普く世出に於ける誑惑思想・反逆思想等の全體を破折して是非曲直を正し、大義名分の苟せにすべからざることを天下後世に警告せられたる萬代不磨の格言也。

(四) 律 國 賊

律國賊とは略言也、詳言せば律宗は國家の法賊なりと也。該宗は道宣・鑑眞・良觀等の弘通する所也。此宗の主義に云く戒律は佛教の根本也、故に五戒十戒二百五十戒五百戒等を堅固に持つべし、若し之を犯すものは法賊にして之を守るものは國寶なりと。然るに此宗が返て國賊法賊なる所以を辨せん。抑戒律を持つは當然の修行なりと雖も、阿含小乘の戒法の如きは是れ當分枝葉の戒法にして萬代不易の大道と云ふべからず、況んや末代下機に適應すべきものにあらず、而して萬代不易根本眞言の戒法とは何ぞや、曰く法華經の大王戒是也、法華の戒は即ち信心爲本の戒にして一切諸戒の根本也、最末法に適應せるもの也。然るに律宗は今末代に及ぶも尙煩瑣なる小乘戒を以て佛道

の根本として一切衆生に其實行を強ひんとす、反て是れ佛道の本領を失し國家の元氣を磨滅する惡法也。且夫彼宗は表面大乘非佛説の横議を唱導して一向小乘律を宗旨とせるに拘らず、裏面反て法華梵網等の大乘戒を竊に盗んで自宗を莊嚴せるものゝ如し、如斯は豈盜賊的行爲にあらずや。況んや我祖と時を同じうせし良觀の如きは、小乘律宗の權義に執して敢て法華大乘の主張者たる大聖日蓮を殺害せんとす、豈破佛破法の大罪人に非ずや。且又該宗の如きは設ひ善意に解するも遙か正法上代の宗教にして尙像法の機に適はず、況んや末代の今日に於ては寧ろ有害無益の邪法なるに於てをや。されば先師傳教像法にありて尙之を死佛教と斷じ極力排斥せり、我祖日蓮今末法にありて更に一層之を痛撃し給ふは寧ろ當然の事と謂ふべき也、『法華經』に云く「我以二小乘一化乃至於二一人一我則墮二慳貪一此事爲二不可一」〔方便品〕等又云く「樂二於小法一者德薄垢重者」〔壽量品〕等、『涅槃經』に云く「我涅槃後無量百歲四道聖人悉復涅槃正法滅後於二像法中一當有二比丘一似二像持律一少讀二誦經一貪嗜飲食二長養其身一乃至雖レ服二袈裟一猶如二獵師細視徐行一如二猫伺鼠一外現二賢善一內懷二貪嫉一如二受レ噉法二波羅門等一實非二沙門一現二沙門像一邪見熾盛誹二謗正法一」〔四相品、會疏四十三〕等と。如此不甲斐劣等なる小乗者の身を以て敢て尊無過上の大乘者に敵し、而して大乘の流布すべき國家を奪取りて反て小乗卑劣の教域となさんとす、豈佛海の白浪法山の綠林に非ずや。我祖是に依て律國賊と斷破し給ふ、良に所以ある也。但し國賊とは亦極して之を言ふなるべし、若し穩言せば律は無得道也等と云ふべき歟。然るに此格言は但に佛教内の律宗を破するに止まらず、苟も之に類似せる心行たる時代不適當の思想並に不可能の難行を停止せしむべく、其代表的破折として律國賊と強言し給ふもの、亦千載不磨の格言と云ふべき也。

要之四大格言は宗祖が一往鎌倉時代に於ける代表的新舊大小の四宗に對して特に折伏の強言を立て給ひたるものなるが、再往は過去を溯源し未來を警戒し天下萬世に破邪顯正の規模を垂れ給ひたる大教訓に外ならず、是全く理義精確にして根據明白なるが故也、蓋し四大格言は約宗的權實判・武裝せる權實論なりと謂ふべし。尙宗旨の三祕に配對せば本門題目の正行を顯すは念佛無間禪天魔の邪行を破する所以也、本門本尊の正境を顯すは眞言亡國の邪境を破する所以也、本門戒壇の眞寶を顯すは律國賊の僞寶を破する所以也。更に一説あり、無間は成佛に對し天魔は佛に對し亡國は安國に對し國賊は國師に對すと、蓋し一義也。若し總別破立を言はば、宗旨の三祕は別立にして四個格言は別破也、而して格言の語尾に付する諸宗無得道墮地獄根源とは總破にして法華獨一成佛とは總立なりとす。我等逆化折伏を以て一宗傳道の方軌と爲さん者は須く先づ此四大格言の理論を精知し而して後實地に之を適應せざるべからざる也。尙委しくは往て祖書の廣文及び古今の論書を研究せよ。

第二項 總破諸宗

我祖は權門各宗中、別しては謗法の顯著なる念佛・禪・真言・律等の四宗を折伏し給ひしも、總じては其他の諸宗をも折破し給へり、所謂諸宗無得道墮地獄の根源法華獨一の成佛是なり、是他なし右四宗の外、成實・俱舍・三論・法相・華嚴等の諸宗も、亦皆宗教の五綱宗旨の三祕の準繩に照すに、或は教の大小權實等を謬解するあり、或は時機の適否を錯誤するあり、或は國體に相應せざるあり、或は教法流布の前後を濫すあり、或は本尊の選擇を誤解するあり、或は信仰修行の正軌を脱線する等あり、故に之を一括して諸宗無得道の破言を下し以て佛教統一の大事を決行し給ひし也。今は只御書を引て其一斑を知しめん。則ち『開目抄』に「俱舍・成實・律宗は三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり天尊の太子迷惑して我身は民の子とをもうが如し（中略）此皆本尊に迷へり例せば三皇已前は父をしらず人皆禽獸に同ぜしが如し（七九二）等と言へるは破小乘三宗の御文也（其他 聖教大意、法華取要抄、一八〇二、七五二等を見よ）又『報恩抄』に「嘉祥大師は法華玄論と申文十卷造りて法華經をほめしかども妙樂かれをせめて云く毀在其中何成弘讚等云云法華經をやぶる人なり法華經をよみ讚歎する人の中に無間地獄は多く有なり」（二四八六）等と言へるは破三論宗の御文也（其他 善無畏抄等、開目抄、本尊問一八〇二等を見よ）又『大學御書』に「又天竺宗天台已後唐太宗世渡之又立八界、雖爲大乘立五性各別無性有情永不成佛立之始似外道法自他宗歎也」（二二六八）等と言へるは破法相宗の御文也（其他 聖教大意、國家論 二二九、開目抄 七五三、兄弟抄、報恩抄、一三二、一四六四等を見よ）又『開目抄』に「徒謂才能とは華嚴宗の（其他 一八五、國家論 二六八、開目抄 七九二、兄弟抄、報恩抄、一三二、一四六四等を見よ）又『開目抄』に「徒謂才能とは華嚴宗の

法藏澄觀乃至真言宗の善無畏三藏等は才能の人師子の父をしらざるがごとし（中略）真言華嚴等の經には種熟脱の三義名字猶なし何況其義をや、華嚴真言經等の一生初地の即身成佛等は經は權經にして過去をかくせり、種をしらざる脱なれば超高が位にのぼり道鏡が王位に居せんとせしがごとし、宗宗互に權を諍、予此をあらそはず但經文に任すべし」（七九二）等と言へるは破華嚴宗の御文也。

（其他 國家論、聖密御書、本尊問答抄 二六八、一六六〇、一八〇二等を見よ）其他『題目彌陀名號勝劣事』に「聖道の人人の御中にこそ實の謗法の人人は侍れ、彼人人の仰らるゝ事は、法華經を毀る念佛者も不思議也念佛者を毀る日蓮も奇怪也、念佛と法華とは一體の物也、されば法華經を讀こそ念佛を申すよ、念佛申こそ法華經を讀にては侍れと思事に候也、かくの如く仰らるる人人聖道中にあまたをしますと聞ゆ、隨て檀那も此義を存じて日蓮竝に念佛者をおこがましげに思へる也、先日蓮が是程の事をしらぬと思へるははかなし、佛法漢土に渡り初めし事は後漢の永平也、渡りとどまる事は唐の玄宗皇帝開元十八年也、渡れるところの經律論五千四十八卷譯者一百七十六人、其經經の中に南無阿彌陀佛は即南無妙法蓮華經也と申經は一卷一品もをはしまさざる也」（四九二）等と云ひ、又『下山抄』に「當世の人人は四衆俱に一慢を起せり、所謂念佛者は法華經を捨てて念佛を申す、日蓮は法華經を持といへども念佛を持たず、我等は念佛を持ち法華經をも信ず戒をも持ち一切の善を行ず等云云、此等は野兔が跡を隠し金鳥が頭を穴に入れ魯人が孔子をあなづり善星が佛をどせしにことならず、鹿馬迷やすく鷹鳩變が

たき者也、無慕無慕」(二五八六)等と言へるは彼の輕薄なる通佛教主義(諸教平均主義)等(各宗歸一論)等の類を破折し給へる御文也。具に茲に評破し難し、委しくは往て祖書の廣文及び諸多の論書を研究せよ。

第三項 台當同異

總述

佛教各宗中天台法華宗の一は我が日蓮法華宗と直接の關係を有す、是特に此一項を設くる所以也。凡天台宗に對する我祖の批判に兩向あり、曰く台當相違の義、曰く台當同一の義也。初義は台當の差異を批論せらるゝ邊也、之に又二あり、一には正統天台と本宗との相違、二には雜亂天台の評破也、『觀心本尊得意抄』に「縦如天台傳教、如法弘通今入末法、如去曆」(一三三〇)と云へる等は前義にして、次下の文に「何況自慈覺已來迷大小權實、同大謗法之間像法利益無之増於末法乎」(一三三三)と云へる等は後義也。次に同一の義とは台當の區別を立て給はざる邊也、之に又二あり、一には外用上的一致、二には内證上的一致也。初に外用的一致とは御化導上的一致也、之に又二あり、佐前附順の義と佐後利用の義也、前者は佐前御化導尙未熟の故を以て新宗教を唱導なされつゝ而も一向に天台に附順し給ひて未だ本化獨歩の宗旨を光顯し給はざる邊也、文應元年天下諫言『立正安國論』の署名に「天台沙門日蓮」とあり、文永三年『法華題目抄』の署名に「根本大師(傳教)門人日蓮撰」とあるが如き是也。後者は佐後本懷已顯の後に於て自己の本領を發揮せ

らるゝ時には天台を去曆昨食と貶し給ひつゝ尙第二義の重に於ては天台傳教等の釋論を助證引用せられ給ふもの是也。次に内證上的一致とは前者の如く附順的(當分)又は利用的(一分)の一致にあらずして、設ひ天台傳教と大聖人と嚴密に其人格を論ずれば本迹の高下無きに非ずと雖も、大體上俱に靈山の聽衆、一佛の菩薩子、法華經の使徒なるべければ、其内心に於て其元意に於て兩者全然一致に歸すべしとの義也、『開目抄』に「一念三千の法門は但法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり龍樹天親知てしかもいまだひろいさず但我天台智者のみこれをいだけり」(七五三)と云ひ、『立正觀抄』に「問天台大師眞實不證得此一言妙法乎答内證不爾也於外用者不弘通之也」(一〇七〇)と云ひ、『治病抄』に「但漢土の天台日本の傳教此二人計こそ粗分給て候へども本門と迹門との大事に圓戒いまだ分明ならず詮する處は天台と傳教とは内には鑑給といへども一には時來らず二には機なし三には譲られ給はざる故也」(二〇九九)と云へる等は要するに台當内證一致なりとの邊也、其他數多の御書中天台傳教内鑑冷然外適時宜と云ふ、其内鑑冷然とは即ち内證一致の點にして其外適時宜とは即ち外用相違の點也。されば若し大判上台當の同異を分別せば、其内證に約すれば同致にして其外用に約すれば差異ありと云ふべき也。然るに同の邊は今の所論に非ず、下去て異の邊を辨ずべき也。

台當異目

御書に顯れたる台當教觀の異目頗る多し、今且く日臨(忍艸)日輝(本迹歸)兩師所作

の條目に據り、略して二十異を示さん。(但し説明は余の見解による、必ずしも兩師の説に執せず)

(一)時世像末清濁異

台家は像法適應の宗教にして比較的清善の時代を教化せし宗教也、當家は末法適應の宗教にして濁惡の時代を救濟する宗教也、現代に於ける適不適並に其救濟力の多少知るべし(報恩抄 一五〇九等)

(二)能弘導師本迹異

天台傳教は迹化藥王の化身、我祖は本化上行の再誕也、迹化を以て本化に比較するに恰も猿猴を以て帝釋に比するが如し、能弘導師の高下は亦其所弘の宗教の優劣をトすべし(聖教大意、本尊等九三四等 一九三 一四七)

(三)所依本經本迹異

當家は一部唯本、台家は一部唯迹なり、前半(台家)後半(當家)と分つに非ず、一部唯本の法華經は果上所見にして勝り一部唯迹の法華經は凡夫所見にして劣れり、其所依の經典の勝劣は亦其能立の宗教の勝劣を判ずるに足るべし(本尊抄、妙一女抄等 九四七 一九八三)

(四)致教三五立法異

當家は昔迹本三重教相を正像末の三時に配して以て宗旨の三祕宗教の五綱を立て、台家は五時八教を以て教相を判釋して三學三諦三觀を明す、則ち彼は在世橫判にして法行的難道也、我は滅後堅判にして信行的易道なり、今末法に於て兩宗教觀の親疎適不亦自ら知るべし(五綱抄、行者值難事、立正觀抄 一〇六八、上野抄、三祕抄 四二四 一〇二六 一八四一 二〇五一等)

(五)人法本尊本迹異

當家は本門壽量品の意により久遠の本佛を第一義とするが故に人

本尊を以て正意とし、台家は迹門方便品の意により實相の一理を第一義とするが故に法本尊を以て正意とす、彼は境的我は智的、彼は法身正意我は報應正意、彼は智慧主義我は慈悲主義、彼は寂靜的我は活動的、彼は理想的我は現實的、彼は抽象的我は具體的なり、兩宗本尊權威の強弱感應の多少自ら驗むべし(報恩抄、三祕抄 一五〇九 二〇五三)

(六)位階名字觀行異

滅後法華經の行者の位階を豫定せられたる分別功德品の五品弟子の位の中の第一隨喜品の位を判ずるに、台家は相似觀行名字の三釋ありと雖も觀行即を以て正意となし、當家は一向に名字即を以て正意とす、教彌權位彌高ナレバ・教彌實位彌下ナレバとの法則に照すに當家の判位は台家の判位よりも優勝にして最も末法の時機に恰當するもの也(四信五品抄等 一五三九)

(七)三種教相傍正異

台家は第一の根性融不融相と第二の化導始終不始終相とを正意とし第三の師弟の遠近不遠近の相を傍意とす或は第一を正意とし第二第三を傍意とす、當家は第三を正意とし第二第三を傍意とす或は第三第二を正意とし第一を傍意とす、如此在世約教判の傍正あるは頓て滅後約宗判の緩急ある所以也(真權出界章 一六四八等)

(八)正行因果惣別異

當家は果佛所證神力別付の妙法を正行とし、台家は因中所具囑累總付の理觀を正行とす、所行法體の龜妙、能行法用の優劣自ら知るべし(立正觀抄 一〇六八、下山抄 一〇六九 一五六〇等)

(九)事理三千觀法異

台家は迷中所具の理の三千を觀ず、則ち一心三觀の智慧を以て吾人

現前刹那の妄心即ち三千三諦の妙境なりと觀する也之を理の一念三千觀と云ふ、當家は果上所見の事の三千を觀ず則ち一心唱題の信仰を以て無作三身の一大圓佛たる南無妙法蓮華經十界勸請の大曼荼羅の全象即ち吾人現前色心の全體なりと觀する也之を事の一念三千觀と云ふ、理事二觀の得失彼此觀心の巧拙之を實驗して知れ(治病抄 二一〇三)

(十)得益種熟分極異 台家は本已有善の機に應じて熟益の化導を探り以て初住の分證を期し、當家は本未有善の機に應じて先づ下種の利益を獎め以て妙覺の極果を期す、利益の初中所期の進退知るべし(唱題抄 三四三、立正觀抄等 三四四、一〇六七等)

(十一)有始無始釋文異 壽量顯本の文を釋するに、台家は且く一邊の五百塵點を立つるが故に即ち有始久遠の淺義を成じ佛界に本無今有の咎あり眞の事相常住も顯れず三世因果の道理も徹底せず終に未究竟の顯本説たることを免れず、當家は否らず壽量の顯本を釋するに無量無邊の塵點を以てするが故に即ち無始久遠の深義を成じ從て本無今有の咎なく眞の事相常住顯れ三世因果の道理徹底す良に究竟の顯本論たるを得る也(本尊抄、灌頂抄 九三九、一〇二八等)

(十二)理具事具顯體異 法界の本體を論ずるに台家は凡夫の理性に十界三千の諸法を具有すと立つ之を理具と云ふ、當家は本佛所見の事相に十界三千の諸法を具備すと立つ之を事具と云ふ、法界本體觀の巧拙思ふべし(三秘抄 二〇五四等)

(十三)物付別付囑累異 本化の如來の付囑を受くるや神力品の別付囑に於てす則ち所付の衆は唯本化に限りて餘人を雜へず能付の法は唯一要法にして餘法を交へず、迹化のそれは囑累品の總付屬也則ち所付の衆は迹化を主として本化他方及び二乘人天等の諸衆を雜へたり能付の法は要の題目を除く一部八卷乃至一切經にして純一ならず、兩宗付囑の純雜相異あるは則ち後世能弘の人所弘の法に高下優劣なる所以也(下山抄 一五六〇等 一五八八等)

(十四)單令雙用弘宣異 天台傳教等は像法本已有善の機の爲に雙用權實(但し龍樹天觀等の以偏助圓の雙用也)の化導也已に下種ある機には必ずしも實教の法華經を要せざるが故也、我祖は末法の初に於ける本未有善の機の爲に單令用實の化導也全く佛種無きものには専ら實教を以て下種結緣せしむるを急務とするが故也、而して餘經は肥料等となれども種子とならざるが故に下種としては一向に用ゐざる也(立正觀抄 一〇六八等)

(十五)本迹傍正表裏異 大判上本迹を台當に配せば台迹當本と云ふべしと雖も、若し細判せば台家は迹正本傍又は迹表(又は迹面)本裏、當家は本正迹傍又は本表(又は本面)迹裏と云ふべし(四菩薩造立抄、本尊抄等 一八五七、九四七等)

(十六)單名五重隱顯異 天台は妙法蓮華經の題目を單に名玄義なりと釋成し妙樂は「尋聲色近名至無相極理」と論ずるが故に五字勝妙の意義尙隱るゝ處あり、我祖は悉に五玄具足の妙

法を談じ且つ名玄よりも寧體玄を主眼とするが故に五字勝妙の意義全く顯る、宜哉我祖獨り題目の權化活ける法華經の稱讚を壇にすることや、台當題目觀の優劣亦知るべき也(會谷抄、三祕抄、一六五五、二〇五三、等)

(十七)攝受折伏開導異 天台は迹門未究竟の教に依り本已有善の善機に對し濁惡ならざる像法の時に當りて宗教を開導するが故に自ら攝受主義を採り、我祖は本門究竟の教に依り本未有善の惡機に對し濁惡の末法の時に當りて宗教を開導するが故に自ら折伏主義を採り給ふ、開導の緩急弘通の難易導師の強弱等自ら知るべし(修行抄、九七〇)

(十八)三學三祕立宗異 台家の立宗たるや其法體を比較的可思議の迹門に置き其當機を割合に利根なる像法に取るが故に三學法行の難道を採り、當家の立宗たるや其法體を不可思議の本門に置き其當機は極めて鈍根なる末法に取るが故に三祕信行の易道を採り給ふ、法體の優劣行道の難易は亦以て兩宗の勝劣死活を定むべき也(立正觀抄、報恩抄、一〇六九、一五〇八、等)

(十九)在滅三五判時異 台家の時を判するや佛在世を正意とす是五時五味の判教を專にする所以也、當家の時を判するや佛滅後を正意とす、是三期三教三重配當の判教を主とする所以也、其判教の豎横在滅の相違は亦以て兩宗時機の適不を卜するに足らん(四菩薩造立抄、一八五七)

(二十)五品位階釋相異 分別品の滅後五品の位を釋するや、台家は五品を通じて觀行即とするが故に最初隨喜品より智的理觀を修するを以て行相となす、當家は最初品を名字即とし餘品

を觀行即とし而も通じて信心唱題を以て正行となす、兩家の釋相を本經に對照するに台家の釋よりも當家の釋を以て本經に適切なりとす、何となれば「而不毀譽一起隨喜心」の文は觀行法行に疎にして名字信行に親しきが故也(四信五品抄、等、一五三九)以上二十異中、前の十異は臨師の所選、後の十異は輝師の所選也、今私に之を略解す、然るに多少の重複無きに非ず、則ち第十五は第三の細判にして、第十八第十九は第四を別開したるもの、第二十は第六を念釋したるものに過ぎず、故に若し其重複を去れば十六異となるべし。就中有始無始釋文異、理具事具顯體異、理事三千觀法異、得益種脫分極異、致教三五立法異、能弘導師本迹異等は最も台當の相違を辨する要目也、其他古今諸師中台當の異目を辨せるもの尠からず、學者往て精研すべし。

要之天台傳教の佛教我祖日蓮の佛教俱に唯一釋尊の佛教を時代に適應して之を祖述したるもの外ならず。故に兩祖が内心に於て其遺文の元意等に於て共通點無に非ずと雖も、然も其人格を論ずれば本迹共に優劣なき能はず、其宗教を論ずれば迹門主義と本門主義との差異あり、其時代を論ずれば像法と末法との差異あり、其機根を論ずれば本已有善と本未有善との差異あり、其國土を論ずれば支那爲本と日本爲本との差異あり、其序を論ずれば中間と最後との差異なきを得ず、又其本尊を論ずれば彼は諸法實相の一理又は法華經一部又は釋尊又は東方鷲王又は彌陀等にして劣り此は南無妙法蓮華經又は其活現體たる無作三身久遠實成の教主釋尊にして勝れり、其修行を論ずれば彼は

理の一念三千觀に立てる十乘觀法二十五方便にして不徹底且つ難行なり此は事の一念三千觀に基づける信念爲本三徳光顯にして徹底且つ易行也、其所期を論ずれば彼は初住成佛理想淨土にして未究竟非現實也、此は妙覺成佛事實淨土にして究竟現實也、如斯合家と當家とを比較簡擇するに入法教觀理事俱に大に優劣差降あり。而して今末法の佛教としては唯獨り我が本化佛教あるのみ、彼天台の佛教の如きは縦ひ像法の當時を利益せしと雖も今末法に入りては全く用を爲さざる事恰も古曆昨食の如し、否但に用を爲さずして即身成佛の目的を達する能はざるのみならず、還て破佛法破國の邪教と云はるゝ也、『十八圓滿抄』に云く「問云天真獨朗之法於滅後何時可令流布哉、答云於像法可弘通也、問云於末法流布之法名目如何、答云日蓮之已心相承祕法此答可顯也所謂南無妙法蓮華經是也、問云證文如何、答云神力品云爾時佛告上行等菩薩以要言之乃至宣示顯說云云(中略)問云今文者授與上行菩薩一文也汝何故已心相承之祕法云耶、答云上行菩薩之可弘通給祕法日蓮先立弘之非當身之意乎上行菩薩之代官一分也、所詮入末法天真獨朗之法門無益也助行可用也正行唯南無妙法蓮華經也、傳教大師云天台大師信順釋迦助於法華宗敷揚震旦叡山一家相承天台助於法華宗弘通日本今日蓮塔中相承南無妙法蓮華經七字末法時弘通日本國是豈非時國相應之佛法耶、入末法弘天真獨朗之法爲正行之者必墮無間大城無疑、貴邊(最邊房)捨年來權宗(天台)日蓮弟子成給眞實時國相應之智人也、總予弟子等如我修行正理給智者學匠之身爲墮地獄何詮可有乎、所詮時時念念可唱南無妙法蓮華經(中略)一心三觀一念三千之極理不出妙法蓮華經之一言敢勿忘失」(二〇〇八)當知正統天台と本宗との相違既に天地水火也、況んや慈覺(眞言に墮落す)安然(禪宗に墮落す)惠心(念佛に墮落す)以降の雜亂天台に於てをや本宗を距ること遠くして遠し、『上野抄』に云く「天台の學者慈覺より已來玄文止の三大部の文をとかく料簡し義理をかまふとも去年の曆昨日の食の如し、末法の初め五百年に法華經の題目をはなれて成佛ありといふ人は佛説なりとも用ふべからず何に況んや人師の義をや」(一八四一)と、要之日蓮聖人の教義は其第二義第三義の點に於ては天台傳教等の教義を採用し應用する所尠からずと雖も、其第一義根本宗義に至りては、上行所傳本化獨歩にして全く天台と其立脚地を異にする也、況んや權實雜亂の所謂中古日本天台の教義に於てをや我祖の絶對に排斥し給ふ所也。然るに古來一流の曲學者あり曰く、日蓮は天台の復興者のみ、日蓮法華宗は天台法華宗の變形に過ぎず、日蓮の學説は中古日本天台の亞流を出でず等と、蓋し方外の妄評と云ふべし、今茲に具に評破し難し。南無妙法蓮華經。

第十章 結 論

佛日西天に没してより已來、四依弘經の宗教夫れ幾許ぞや、然り而して萬國に比類なき妙法蓮華經宗を宣傳せる宗門ありや否や、假令立宗するも復能く教法の權實を辨へ本迹の起盡を糺す宗門あり

りや否や、假令明教するも復能く所被の機根の本已有善なるか本未有善なるかを鑑みる宗門ありや否や、假令鑑機するも復能く妙法廣布の時運を察する宗門ありや否や、假令察時するも復能く圓機純一の國土に依れる宗門ありや否や、假令依國するも復能く教法流布の前後を考へたる宗門ありや否や、假令考序するも復能く天地の精宗法界の神靈たる久遠の本法を發揮せる宗門ありや否や、假令發揮するも復能く清麗たる無作本覺の朝暾を揭示する宗門ありや否や、假令揭示するも復能く四海歸妙王佛冥合の戒壇を建立すべく豫言せる宗門ありや否や、假令豫言するも智慧圓滿の大聖哲を奉戴せる宗門ありや否や、唯我日蓮法華宗のみ諸の功德を具足せり、豈に印度の釋迦教に劣るべけんや、況んや天台傳教等の佛教に比すべけんや、何に況んや道宣等の律宗、玄奘等の法相宗、澄觀等の華嚴宗、弘法・慈覺等の眞言宗、達摩・道元・榮西等の禪宗、法然・親鸞等の念佛宗に類すべけんや、何に況んや老子の道教、孔子の儒教、耶蘇の神教、マホメットの回々教乃至ソクラチス、プラトン、アリストートル、カント、ヘーケル、スピノザ等の西洋哲學に比すべけんや、然れば則ち之を如何ぞ其れ稱美讃嘆せざるべけんや。然り而して我日蓮宗の二大教義たる妙法統一論と信仰爲本論とは實に本化別頭の教(五翻) 觀(三秘) 二門に依て精選せられたる最上無二の寶賜にして、而して是實に我祖日蓮上人唱導獨特の宗義、東西古今の英匠哲人も尙未だ預からざる妙道也。此は是れ諸佛出世の本懷一切衆生成佛の直道也、眞に宗教を求むる者、眞に佛教を信ぜんとする者、眞に世

界の文明を進歩せしめんと欲する者、眞に國家の太平を祈る者、眞に一家一門の平和を希ふ者、乃至自己の安心立命を現當に確立せんと欲する者は、速に來つて此教を聽き此宗を信せよ、必ずや無量の功德無邊の利益あらんこと疑ひ無し。若夫宿福深厚にして既に此教を信じ此宗に入れる者は、此の世界無二の教觀相資の大宗教を遺し給ひたる本師釋尊及び宗祖大聖人の大慈大悲に感激し、益信を固め行を勵み智を開き徳を磨き、勇猛精進以て大法宣傳の聖業に盡力せざるべからず。然れば則ち全宗門の僧俗男女よ、徒に世學俗藝に汲々として汝の宗乘を修むるに不忠實なる勿れ、放逸にして五欲に著して汝の祖宗を辱むる勿れ、單信無智の小成に甘んじて修徳顯現の大果を期せざること勿れ、無戒不徳に安んじて世人の侮蔑を招くこと勿れ、八派九流異體異心にして廣宣流布の祖訓に背くこと勿れ、攝受退嬰にして折伏進歩の元氣を消磨すること勿れ、徒に舊株を墨守して時代の進運に遅るゝこと勿れ、興學布教を怠り自家の天職を汚瀆すること勿れ。醒めよ宗門の徒、起てよ宗門の徒、高祖曰く「佛滅後二千二百二十餘年が間迦葉・阿難等・馬鳴・龍樹等・南岳・天台等・妙樂・傳教等だにも、いまだひろめ給ぬ法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろませ給べき瑞相に日蓮さきがけしたり、わかたうども二陣三陣つゞきて迦葉阿難にも勝ぐれ天台傳教にもこへよかし、わづかの小島のぬしらがをござんををぢては、閻魔王のせめをばいかんがすべき、佛の御使となのりながらをくせんは無下の人々なり」(種々御振舞書)と、又曰く「日蓮が

弟子等は臆病にては不可^レ叶、彼彼の經經と法華經と勝劣淺深成佛不成佛を判ぜん時、爾前迹門の釋尊なりとも物の數ならず、何況や其以下の等覺の菩薩をや、まして權宗の者どもをや（教行證御書 一一三二）と、又曰く「詮ずるところは天もすて給へ諸難にもあえ身命を期とせん、身子が六十劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪へざるゆへ、久遠大通の者の三五の塵をふる惡知識に値ゆへなり、善に付け惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし、大願を立ん、日本國の位をゆづらひ法華經をすて、觀經等について後生をせよ、父母の頸を刎念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも智者に我義やぶられずば用じとなり、其外の大難風の前の塵なるべし、我日本の柱とならむ、我日本の眼目とならむ、我日本の大船とならむ等と、ちかひし願やぶるべからず」（開目抄八一六）等と此は是六百有餘年の昔我祖大聖人が如來の使末法の大導師として、謗法の闇無明の闇を破るべく、法華經王軍の大將として無上の教權を振ひ、以て我等法華教徒に號令し且つ鞭撻し且つ摸範を示し給へる有聲の文字にして今尙千古に餘韻を響かせつゝあるに非ずや、敢て一宗緇素諸君の猛省自覺を促す。願くは此書の所説をして常に机上の空論に終らしむることなけん、願くは天下憂宗の志士と共に異體同心に本佛の精神本法の眞理本化の聖教を信解實行し、以て一宗の所期たる所謂一天四海皆歸妙法の大理想を一日も早く地上に實現し、自他俱に安く同じく常寂の都に遊ばんことを。

南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

願くは此功德を以て 普く一切に及ほし

我等と衆生と 皆俱に佛道を成せん

新撰 日蓮宗綱要終

新撰 日蓮宗綱要跋

肉弟北尾日大師、頃日「新撰日蓮宗綱要」を草し、之が文章及び出版の事を談じ、且つ跋文を余に囑せらる。然るに余や淺學不才、加之、罪障深重にして家累少からず、永く法義を研鑽するに由なし。而も之を一讀するに、章句若くは其末葉に於て、稍完璧を期し難からんも、其の本旨は、能く久遠の妙趣、高祖の大義を明にし、學佛の者をして、其の大綱を了せしめ、安立を希ふ者をして、其の指針を得しむるものたるや、疑なし。此に於てか、誠意を注いで、之が發行を助くることとしたり。斯著果して教界を益する所あらば、余亦幸甚也。

因に著者の經歷を叙すれば、北尾日大師、字は啓玉、蓮華道人と號す、俗名は次郎、故鳥取藩士徳北尾義雄の養男也、明治十年六月を以て、鳥取に生る。生父は同藩士田中之盛、之盛九子あり。一は長女和喜、性敏慧にして學を好む、十八歳進んで佛門に入り、波羅密を稱す、岡山檀林に學び、苦修練行、成績群を抜く、將に業を卒へんとして天す、時に年二十、知る者惜まざるはなし。二は長男久、即ち余、二十五歳にして父の喪に遭ひ、家を嗣ぐ、筆劍を揮ひて、社會を警醒せんす。三は次男次郎、即ち日大師、二歳、北尾家に養はる。養父嚚に逝き、養母亦歿す、田中家に同輩たり。四は三男三郎、母の里、加納善四郎の養嗣子となり、今、共立商工銀行浦富支店長たり。五は次女京、岡山縣人小野役次郎を迎へ、後、田中商店を承け、分家す。六は四男四郎。七は五男五郎、安田家に入りて天す。八は三女芳子、安田家に養はれ、今、女醫となる。九は妙子、京都府獻醫伊庭憲一に嫁す。師幼くして惻隱不羈、七歳小學に入り、十二歳中學に入る。田中家代々日蓮宗たり、祖母勇、北尾家より嫁す、性活達、固く妙法を崇敬す。生父之盛實性律義、夙に妙法を篤信し、身を忘れ、家を忘れて、護法扶宗に努む。明治の初め、士分の帶刀隨意なるや、率先して身を商估に委ねしも、射利志望に添はず、或は人に欺かれ、家計頗る困難也。生母辰、姑に事へて孝、勤儉所を治め、勞苦挑ます。之より先き、之盛、行商の傍ら、菓子商店を開き、以て一家の衰運を復し、且つ護法扶宗に資せんす。而も子女多くして家計意の如くならず、母乃ち、日夜憂々として勵み、

弟妹孰れも、學を廢して家業を助く。師亦中學を退いて、該商店を經營し、漸く盛ならんをす。而して學佛の志、遂に禁する能はず、意を決して之を父母に乞ふ。余亦其の志を諒とし、師範として日蓮日辰二師を推す。中、日辰師は、今の大本山妙顯寺貫主河合權大僧正也。日辰師、初め鳥取に在りて、擯出の難に遭ふ。父等篤く歸依して事無からしめ、又長女をして就いて得度せしむ、學識行法、眞に僧伽を辱めず。師輒ち日辰師を擇び、自ら髮を削り、且つ自誓受戒して、遠く笈を、東都大檀林なる日辰師の許に貢ふ。時に年二十歳也。爾來苦學力行、橫濱妙香寺小檀林、京都本願寺中檀林等を経て、現大崎町日蓮宗大學林に學び、明治四十年三月卒業。明治四十二年三月、同大學教授清水龍山師等の推薦により、同大學中等科教授に召聘せらる、仍て一時住職たりし京都妙顯寺塔中十乘院を棄て、赴任す。同年九月同大學舍監を兼任す、四十四年二月、兼任を辭し、爾後專任教授となり、主ら宗乘を教授して今日に至る。今著『新日蓮宗綱要』は、其の教案に基きしものにして、實に師の處女作なり。然るに師は今夏の暑中休暇を以て、之を推敲したりしに止れるを以て、内容に於て、形式に於て、蓋し意に満たざるものあるべしと信ず。されど師や、春秋に富み、志氣亦雄大、前途尙遠也。思ふに、斯著に満足せずして、益々向上發展、他日筆に舌に、大に宗門を覺醒せらるゝに至るや必せり、願はくは吾等兄弟、異體同心、宗門維新の先驅となり、高祖の所謂、一天四海皆歸妙法の理想を實現せんことに、力を効さんことを。

終りに、日大師の斯著たるや、實に生交護法の微旨、實姉求道の遺志、且つ養父好學の素志に添へるもの、偶本年六月三日、養父五十回忌に相當す。豈宿縁にあらずとせんや。乃ち幾々私事を陳べて、跋文に代ふ、南無妙法蓮華經。

東都礪川の寓居に於て

大正三年初秋

玲瓏居士 田 中 久 識す

大正三年九月十三日印刷
大正三年九月十六日發行

不許複製

新日蓮宗綱要附
定價 上製壹圓貳拾錢
並製壹圓(送料八錢)

著作兼發行者 東京府荏原郡大崎町谷山百九十九番地 北尾 啓玉

印刷人 東京市麴町區三番町五十番地 草木 豊次郎

印刷所 東京市麴町區三番町五十番地 草木 活版所

發行所

東京市芝區二本板一丁目十八番地
振替貯金口座東京二二六八番

日宗新報支社

FT-2T-17

終

